

連
句

猫蓑作品集
十四



序

平成十五年は猫蓑会にとって激震の走った年であった。会を創設し主宰してこられた東明雅先生が十月二十日に逝去され、会員全員大いなる悲しみに包まれた。近親者による葬儀・告別式の後、十一月二十四日に学士会館で「猫蓑庵東明雅先生を偲ぶ会」を開催し、ご家族・ご来賓を含めて百十六名の参加を得た。明雅先生の遺徳を偲び、会員すべてが先生にご指導いただいた連句にさらに精進する決意を新たにした。この会に寄せられた追悼句は百五十六句に及んだが、偲ぶ会の内容は別途『追悼集』を作成することになっているのでそれをご覧いただきたい。

さて、『猫蓑作品集』は平成三年に第一号を発行してから、毎年その前年に巻かれた作品を編集・発行し、今年で第十四号を迎えたことは喜ばしい限りである。今回収録した作品数は歌仙三十一巻、源心十四巻、短歌行二巻、二十韻十四巻、半歌仙十六巻、その他一卷、計七十八巻である。前年よりも歌仙が増加し、半歌仙が減少しているが、全体の収録作品数はほとんど変わらない。新しく作品を発表する人がいる一方、健康等の理由でベテランクラスの方の作品応募がやや少なかったことによる。

今回の収録作品のもう一つの特徴は、明雅先生と一座した作品、文音した作品が例年よりも多いことである。明雅先生が会長職を退かれた後も柏連句会での実作のほか、多くの方々と文音で連句を楽しんでいたことが分かる。

『猫蓑作品集』は年間五百巻を超える会員の創作作品の中から、各自が自選した捌き作品一巻のみを発表するもので、猫蓑会の現在の実力を示すとともに、会員一人ひとりの成長の度合いを示すものでもある。率直に言って、独りよがりで意味不明の句、付け味や転じに疑問符のつく部分を含む作品も散見されるが、これも成長の過程として手を加えずに採録してある。連句作品の良さで評価されるように、お互いに研鑽を積むことが重要である。切磋琢磨し、それを楽しみながら一つの作品を作り上げる「連衆心」の重要性を先生は再三説かれていたが、より良い作品を目指すために、連衆心をもつて創作活動に取り組んでいただきたいと思う。現代の「世態人情諷交詩」として、より高度のものを会員全員がめざして行きたいものである。

最後に、本号の編集・出版に努力された方々、校正の労をとられた方々に深く感謝申し上げる次第である。

平成十六年二月二日

猫蓑会会長 青木 秀樹

目次

序 青木 秀樹 1

歌仙

初懷紙 武井 雅子 捌 8

水仙や 東 郁子 捌 10

割下水 青木 泉子 捌 12

大いなる山 青木 秀樹 捌 14

世の中に 青島ゆみを 捌 16

鶴渡る 市野弘子 捌 18

ギザギザの地平 井上 鶴鳴 捌 20

星冴ゆる 内田 麻子 捌 22

冬障子 梅田 利子 捌 24

三千歳 梅田 實 捌 26

火星近づく 蒲原志げ子 捌 28

酔へば果報の 倉本 路子 捌 30

翁慕ひて 近藤 守男 捌 32

キューポラの街 権頭 和弥 捌 34

漱石忌 坂本 孝子 捌 36

笑み真似て 式田 恭子 捌 38

子規庵や 下鉢 清子 捌 40

筆一本(脇起り) 鈴木美奈子 捌 42

啓蟄や 鈴木 了斎 捌 44

秋の蝶 副島久美子 捌 46

有難き沙汰 染谷佳之子 捌 48

立春や 武村 利子 捌 50

都大路 橘 朱鷺子 捌 52

衣張山 田村 満子 捌 54

踏み入るや 長崎 和代 捌 56

あかざの杖 原田 千町 捌 58

神の旅 佛測 健悟 捌 60

源心

うぶぎぬ	松島アンス	92
一乗寺下り松	本屋 良子	90
時雨るるや	矢崎 藍	88
旅心	吉藤 一郎	86
		84
		82
		80
		78
		76
		74
		72
		70
		68
		66
		64
		62

梅の実	稲垣 渥子	92
行く秋	金久保淑子	90
梅雨晴間	加藤 治子	88
小名木川	上月 淳子	86
青 柿	佐久間 然	84
薄暑かな	繁原 敏女	82
仔豚もも色	篠原 達子	80
かがなべて	島村 暁巳	78
鼻丸き地藏	谷本 守枝	76
至福かな	豊田 好敏	74
大 楠	中森美保子	72
		70
		68
		66
		64
		62

短歌行

ビスクドール	百武 冬乃	94
巴里祭	間瀬 芙美	92
ことだま	松本 碧	90
		88
		86
		84
		82
		80
		78
		76
		74
		72
		70
		68
		66
		64
		62

二十韻

大いなる夢	久保田庸子	94
百千鳥	長坂 節子	92
		90
		88
		86
		84
		82
		80
		78
		76
		74
		72
		70
		68
		66
		64
		62

昨夜の雨雫	秋山志世子	94
難波津や(脇起り)	浅賀 丁那	92
月の下	小池 啓子	90
大黒天	佐々木有子	88
山茶花や	杉山 壽子	86
筆跡の	中野 昌子	84
運河に若葉	生田目常義	82
晩菊の	林 鐵男	80
		78
		76
		74
		72
		70
		68
		66
		64
		62

半歌仙

十番の		松原 弘子	捌	124
産土は		宮川 侑子	捌	126
重ね来し		八代 颯	捌	128
麦の波		山田美代子	捌	130
麦の風		吉藤とり子	捌	132
古池に		若林 文伸		134
冬ぬくし		木村 真呂	捌	138
鬼捨子		桑原 美津	捌	140
菊の酒		五味 蓉子	捌	142
カルバッチョ		佐古 英子	捌	144
一の酉		須賀 敬子	捌	146
ゴッホの糸杉		鈴木千恵子	捌	148
月いづく(脇起り)		棚町 未悠	捌	150
句 鳥		中田あかり	捌	152
ハイテク交番		中林 あや	捌	154

表合せ八句

銀座より海		難波さえこ	捌	156
あつみ山や(脇起り)		登坂かりん	捌	158
さらきらと		間 佐紀子	捌	160
樹の息遣ひ		山口 美恵	捌	162
モガの衿元		山崎 一恵	捌	164
こぶしの芽		山田喜美枝	捌	166
柳絮かな		山本 要子	捌	168

発句

けふのこと		秋元 正江	捌	170
佃 祭		秋元 正江		171
あとがき		梅田 利子		172

歌

仙

初懷紙

おだやかな日和続くや初懷紙

年酒の香の残る口元

野球場子どもの声の賑やかに

夢すやすやと眠るビーグル

今年また名月仰ぐ旅の空

紅葉賞でつつ辿る山裾

入選を知らせる電話美術展

閨秀作家は糟糠の妻

僕の趣味賭マージャンとパチンコと

大漁旗の翻る浜

笛の音も急なり御輿荒るる時

白シャツの子を肩に見る月

ハリーポッター人気ますます沸騰し

都心このごろ通り魔の巣か

肉魚お茶もお米も騙されて

一家総出で励む屋根葺

淡墨の花も漸く綻びぬ

バルーン高く仰ぐ春の野

武井 雅子 捌

東 東 武
井
郁 明 雅

郁 明 雅 郁 明 雅 郁 明 雅 郁 明 雅 郁 明 雅 子 雅 子

ナオ
悪友のハーレーダビットソンを借り

足利学校人も疎らに

大根を洗ふ老婆の土地訛

ホテルの地下に狸棲みつき

ナイル河間近に謎のピラミッド

風死す巷熱き眼差

白百合の瞼閉づれば浮ぶ君

心に響く郭公の声

1LK高層マンション最上階

四十過ぎてフリーターとか

盆踊り氷川きよしの振りを真似

ナウ
月のさやかに太る秋蚕

豊作の心にかかることもなし

インターネットデジカメに凝り

若者も神田の街も変はりはて

縞々もやうの仔猫抱き上げ

マラソンのテープを切れば花吹雪

名水の湧く井戸の陽炎

平成十五年一月十九日 首尾
於 猫養庵

郁 雅 明 雅 郁 明 雅 郁 明 雅 郁 明 雅 郁 明

水仙や

文音

水仙や古鏡は謎の薄曇

雪見障子に移る日の影

マラソンのトップランナー現れて

御近所さんと交す目礼

名物の月餅買ひに來し老舗

籠のカナリア声のさはやか

ミカエル祭赤い帽子の大司教

嘆きの天使涙こらへて

狂ほしく砂漠に彼の跡を追ひ

DNAは争へぬもの

あこがるる明治男の生きざまに

たけくらべ読む明易の月

夏館散歩をねだり犬の鳴く

スクエアダンス今や酣

ボン・ヌフを過ぎてセーヌの川下り

体内時計酒を欲しがる

紅枝垂満開の夜の花簪

出開帳とて友と來し旅

東 郁子

東 東 原
田

郁 明 千

郁 雅 町 郁 雅 町 郁 雅 町 郁 雅 町 郁 雅 町 子 雅 町

ナオ

人の世の春と修羅とを存分に

乱調にこそ美は有りと云ふ

馬のぬ馬小屋メルセデスベント

バッジ一つで変はる運命

白扇をぱつと開いて舞つて見せ

酔はされしあと知らぬ存ぜぬ

昨夜見た別嬪さんは化け猫か

相続税に消えるお屋敷

思ひ出のテニスコートも閉ざされて

夢幻と過ぎし一生

又造の描ける月の白金に

空澄みて吹くピッコロは誰ぞ

立秋の窓辺に槍ヶ岳の穂が覗き

鯨小紋着て座る懷石

ハイ・チーズ笑顔さまざまボラロイド

グッドライフを願ひ願はれ

未だ見ぬ花に憧れ花行脚

風に任せて風揚げる児ら

平成十五年一月三十日 起首

平成十五年二月二十二日 満尾

郁町雅 郁町雅 郁町雅 郁町雅 郁町雅 郁町雅 郁町雅

割下水

青梅雨や傘かしげ行く割下水

塀にこぼるる飯桐の花

パテントの国際事務所立ちあげて

縁なし眼鏡丁寧拭く

渡り鳥羽を休める月の山

草泊まりして語る父と子

新蕎麦を打つ男手の鮮やかに

麻布十番ブティックに寄り

うかうかと甘えじやうずにはまる罨

次の主役を攫ふ雪女郎

寒月に櫓太鼓の鳴り納め

耳で体温計る空港

原稿は電話取材で済ませやう

端数はヤツに持たすワリカン

白髪を丁髷にしてボランティア

若き芭蕉の復刻の像

花の昼牛屋の框つややかに

壬生念仏の鉦のお稽古

青木 泉子 捌

青木 泉子

坂本 孝子

登坂 かりん

高橋 豊美

吉村 ゑみこ

孝

豊

ゑ

ん

孝

豊

孝

ん

孝

ゑ

同

孝

豊

ナオ

家刀自のきつちり纏ふ春シヨール

どこでも仕切る癖のある人

油差す吾もまた世の齒車か

テールライトの消える隧道

大瑠璃の美声がウリの出湯宿

おねえ言葉の似合ふいごっそう

宰相に昔名妓の心立て

寝刃起こして交はす盃

*ブーケガルニ効かせてポトフ煮込むらん

天使は窓に頬杖をつき

枸橘の月は罪さへ許す色

ナウ
唐臼で搗く五穀雜穀

三峡の沈めるダムに鯀釣る

生きた証にこんな石ころ

包装は再利用紙の和菓子店

育ち盛りの腹に虫飼ふ

デジカメに収まりきらぬ花大樹

家庭菜園土匂ふ頃

*ブーケガルニ…洋風煮込み料理に入れる香草の束

平成十五年六月十五日 首尾
於 清澄庭園 大正記念館

豊 泉 孝 ん 孝 豊 ん ん 孝 豊 泉 孝 同 ん ん 孝 ん ん

猫蓑庵明雅先生 追悼

大いなる山

錦秋の大いなる山暮れにけり

栗名月に添へし盃

ちちろ鳴きブルース低く聞こえて

駅のホームに復習ふステップ

釣糸を垂れし岩場に地図拡げ

麦稈帽の色の褪せたる

移民には移民の掟油照

鑿の跡の教会の地下

髪を切り男姿で逢ひにくる

指輪をはづす時のときめき

七つ屋の物言ひばかり柔らかに

ちよこなんとして坐るお多福

若狭から京へ月夜の雪の道

根深たつぷり入れて素鰐鈍

漆塗る職人の手のたくましく

二眼レフよりはやる写メール

かの国のかの花今も忘れず

春の微熱に浅き夢見て

青木 秀樹 捌

青木 秀樹

八代 朱鷺子

橘 孝子

坂本 孝子

中田 あかり

朱

孝

同

り

朱

孝

嬬

孝

嬬

朱

嬬

朱

孝

ナオ

ファンファーレ陽炎崩す駿馬達

三十五と割り切れぬ世に

立役は馴れた台詞で出端の見得

うまい具合に嬰兒の泣く

鳩よ飛んで伝へよ私の哀しみを

ホテルの壁に偽のシャガール

悪党もここまでくれば可愛くて

門跡様の香しき汗

摩訶不思議こんぺい糖の角の謎

ブリキ自動車高い値で競り

潮騒に人声まじる月の浜

ナウ

小津作品に想ふうそ寒

障子貼り広々となる奥座敷

孫の点前に目を細めをり

ローカル線たった一輛遠景に

丸いポストが消ゆる街角

公園の花守笑まふ花の下

黄金週間予約満杯

平成十五年十一月二日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

り 樹 り 同 孝 り 嬬 り 嬬 朱 孝 嬬 孝 樹 孝 朱 り 同

世の中に 文音

世の中にめぐり来たれる若葉かな

夏の匂ひのただよへる時

お茶漬けとパンとコーヒーとりそへて

鞆を持って違ふ横顔

弦押さふ左小指を月も見る

秋撫子も育つ屋敷に

とつとして鴝の高音のたちあがり

よくよく見れば可愛い眼をして

ひいふうみいコロすをとこの数の内

シャワーで流しさっぱりさっぱり

人形とおかしな針のある時計

赤いびーだま西に沈んで

ひんがしに月上りきてラガー達

イングランドに留学の冬

湖と杜に詩人を訪ね行き

まひごになつた羊一匹

せがまれてお伽の国に花降らせ

回転椅子でうらうらと夢

青島 ゆみを 捌

青島 ゆみを
杉山 壽子

ナオ
春雷に希望の扉開けさう

を 壽

これがなんぼであれがなんぼや
傘の穴一番星を覗くため

レースのボレロリサイクルして
水虫が皮をくぐつてご機嫌よう

わるい奴ほど深く潜行

人さらひ民話の中のことでなく

心中立てを覚悟したかえ

惚れ薬たらされバックのなすまに

知らないうちに債務凍結

ひと吹きで翔びたちさうな三日の月

どぶろくを先づ腹にをさめて

ナウ
拝み太郎どこかで誰か呼んでゐる

ドンウッタといひ戯れあひし頃

砂山はさらさらさらとさやうなら

世を逆しに蟹気楼出る

青き海きりぬいた青の花衣

クレソン膳に芥子味噌和

*ドンウッタ…昭和二十年頃の子供の遊び。鉄砲で撃った真似。

平成十五年五月二十五日 起首

平成十五年六月四日 満尾

鶴渡る

つらねうたの思ひ出いくつ鶴渡る

眠れる山を映す湖

トロフィーに勝者の名前彫られるて

揺り椅子ゆらしパイプ磨きつ

湯殿まで長き廊下の月の影

焼きもろこしの香り嬉しく

今年酒まづ産土の神へ注ぎ

道化師となり愛のとりもち

スカートを踏まれしことも懐しく

こぶしふり上げ選挙演説

肩こりの専門医まで肩がこり

噴井を蒼く月の染めたる

ひそやかに岡城址の夜の蟬

次の一手を天元に打ち

気紛れのロトシックスが大当り

満漢全席われもわれもと

助六の見得の良くあふ花の下

父祖の匂ひの耕の土

市野沢 弘子 捌

市野沢 弘子

坂本 孝子

原田 千町

篠原 達子

松島 アンズ

豊田 好敏

孝

町

孝

ズ

敏

町

孝

敏

達

ズ

敏

町

野生馬に轡かましてかげろへる

オンブズマンが書きし意見書

薬とはすべて異物とところへよ

黒手袋のさぐる鍵穴

着ぶくれの女一枚づつ脱がす

非ユークリッドもいつか交はる

小間の席膝触れさうに楽茶碗

名物教師ではやる予備校

男子部もシンクロナイズドスイミング

切つても切つても金太郎あめ

月昇り良寛さんの筆あそび

戸口の杖にすだく蟋蟀

借金のすべてを払ひ牧閉す

黙って座ればドライ・マティニー

オリエント急行列車ゆるやかに

別れはひくき故郷の歌

花吹雪来し方白くなつてゐし

柔東風なでる幼児の頬

平成十五年十一月十四日 首尾
於 俳句文学館

達弘孝ズ町敏ズ達ズ孝敏孝同町ズ達敏孝

ギザギザの地平

ギザギザの地平を圧すや神渡

残る紅葉の揺れてゐる枝

高下駄で厨房の床洗ふらん

クリーニングの御用聞き来る

十三夜この待針の曲りぐせ

築港の先霧笛短く

ヌーボーのグラスの紅に火照る頬

供奉の中尉の軽きウイット

姉さまの恋しい人の走り書き

玉葱型の塔の立つ町

コンボイの給油待つ間にハモニカを

蟬捕る網をかつぐ子供等

枇杷熟れて熱さまし服む月の窓

密室トリック袋綴じにて

声だけが流れフセインビンラディン

立ち見の席の常連の顔

花吹雪睨んでとめてみせやせう

磯巾着の幸せの息

井上 鶴鳴 捌

井上 豊田 大窪 井上 坂本 孝
石 敏 枝 孝 敏 枝 孝 石 枝 同 子 町 鳴 枝 敏 石

石 敏 枝 孝 敏 枝 孝 石 枝 同 子 町 鳴 枝 敏 石

ナオ

春の朝命の水だボンジュース

女子マラソンの誓ふリベンジ

鬼佛またぎの越える山ひとつ

かくれ里にて日がな機織る

あの時にうなづけば今トップレディー

猫舌だから接吻は下手

落書きも泣くよ聖夜の五番街

慈善鍋より電車賃借る

探偵はきつと誰かに似てる顔

長屋門から通る道具屋

蛇穴に入れば中天月円く

ナウ
運動会の著き白線

冬仕度辞世の言葉さがしをり

眼鏡の上にまた眼鏡かけ

したたかなマネーゲーマーグローバル

燕来て巣を掛ける軒先

あのあたり馬頭星雲花の闇

炉塞の碗包む掌

孝鳴 同町 孝町 石敏 枝石 敏孝 敏町 枝町 孝鳴

平成十五年十一月二十二日 首尾
於 緑華亭

内田
麻子
捌

ナオ

小授鶏に呼ばれて我に返りたる

スリラー物にはまる宅浪

西班牙の王の偉功を見るツアー

いつしか出来た男友達

こんな人だったと向き合ふ退職後

私矢張り産んでみたいわ

鳶鷹と言はれし男今は只

母の残した寒牡丹咲く

六十のつれづれとして麻雀を

べき、べく、べけれ何の活用

月と呑むワインと酒とブランデー

糸瓜の水の間に合はぬ人

足止めて小さき公園黄落す

スケッチブック取り出してゐる

ゴッホ描く鳥飛ぶ空夕暮れに

世のうつろひをはずに構へて

農道にお祭りの列花吹雪

時刻表みるのどらかな駅

平成十五年十二月六日 首尾
於 房連庵

保弘 恭麻弘 保麻 恭保弘 恭麻弘 保麻 恭保弘

冬障子

クリスチャニアで春のゲレンデ

梅田利子 捌

奈

ナオ

夕霞下校うながすチャイム聞く

永字八方塾をはしごす

黒い服流行り出したる繁華街

無党派層にかかる当選

すき焼の僕の領土を侵すなよ

遠き空から鯨起し来る

贋物は本物よりもドラマ生み

おしやれ泥棒恋もお金も

屏風歌熱き想ひをたたみ込み

大事にしまふ祖母の古裂

月の弓コロボツクルが座りをり

ナウ

叩きそこねし脛のあふれ蚊

秋収倉にしつかり鍵を掛け

テレビ料理に釘付けの夫

おほけなき浮世の民の使ひ捨て

合切袋下げてぶらぶら

花筏出くづしに流れ行く

江戸の古地図のうらなる川

平成十五年十一月九日 首尾
於 柏市光ヶ丘近隣センター

清 利 ズ 奈 り 利 清 奈 ズ り 利 清 ズ 奈 り 利 清 ズ

胡蝶舞ふ司馬遼偲ふ読書会

盗品ばかりローマバザール

屋根裏を常宿とするデカくづれ

強き酒など欲しき暮れ方

尼の袖つかみ還俗ささやいて

どちらをゆくも恋の修羅道

蟒蛇が舌ちよろちよろとぐろ巻き

きりなく続く「猫ふんちやつた」

セツ屋の養子話は魅力なり

上膳拵を膳楊枝くはへて

ヘツカムのシート決めには笑まふ月

黄色い旗を振つてやや寒

縦縞が粹に映えたり秋袷

付き合ひたくない蕎麦を啖むやつ

うちあげのフォークダンスは続きをり

また没になる記事のあれこれ

たたなつく山脈はるか花霞

めかる蛙に誘はるる午後

平成十五年八月七日 首尾

於江ノ島神奈川女性センター

敏實敏泉や敏泉敏泉敏實敏や泉や泉敏同

火星近づく

蒲原 志げ子 捌

すだく虫火星近づくこと知るや

六万年を辿る初月

零余子飯炊いてもてなす友ありて

写真とり出す胸のポケット

キャンパスのアフターテニス盛り上がる

暑中見舞の届くこの頃

ウ
こんちきちん山鉾巡幸角曲がり

素顔は見せぬ粋な旦那さん

奔放な愛の小説地のままだに

週末婚の今や泥沼

新幹線のぞみに出来た自由席

ワグネリアンの総理満悦

不揃ひの冬の林檎を月に投げ

三日坊主が日記また買ふ

やすやすと父の作りし観世絛

あて、うけ、はね、こう、黒白の石

花時はコンピュータに任されず

知らない町に探す猫の仔

蒲原 志げ子
倉本 路子
金久保 淑子
橘 朱鷺子
篠原 達子
近藤 守男

鷺 同 淑 達 鷺 げ 淑 達 同 鷺 男

ナ

風光る島に青年医師赴任

無芸大食表看板

待ち合はせゴルゴ13立ち読みで

自爆テロもて聖戦といふ

酒は冷や女は太めがやはり良い

脱いだ水着は一握り程

化粧井戸あなめあなめとしやれかうべ

孫に小遣ひ渡すピン札

挨拶は軍隊調ですお爺ちゃん

喇叭飲みする富士の湧水

黒潮の流れに乗って月渡り

ナ
隣も秋刀魚焼いてゐる路地

うそ寒の街に鴉と知恵くらべ

子育て蔵揃ふあぶちゃん

BSのアンテナは向く南西に

イラストだけで綴る回覧

またまみゆ覚悟の花とわかれしを

紫煙うすうすくゆる春宵

豊
田
好

守 げ 敏 守 淑 鷺 達 敏 淑 路 敏 鷺 守 達 淑 守 路 淑

平成十五年八月二十六日 首尾
於 新宿消費生活センター

今宮水壺氏 追悼

酔へば果報の

とろとろと酔へば果報の花ふぶき

枝移りつつ鶯の声

腕組みて埴輪は笑まふのどらかに

おつかひにゆく姉と弟

ユビキタスいつ来るのかと月へ問ふ

忘れ扇を閉ぢて開いて

鞍馬から貴船へ下るそぞろ寒

魚板の腹の深く窪みぬ

たしなみは財布に秘めしバイアグラ

コバルトブルーバジャマお揃ひ

波音を枕にふたり明かす夜

にはとりだつて空を飛びたい

砂漠灼け人間の楯立ち並び

素足で越えし国境の山

泪拭く「おしん」ドラマのリバイバル

月月火水木金金

満開の辛夷に触れつ玉兎出づ

イースターエッグ七彩に染め

倉本 路子 捌

水 壺 佛

竹 田 登代子

倉 本 路子

染 谷 佳子

長 崎 和 代

山 本 千代子

篠 原 達 子

代 之

代 之

千 代

達 子

登 子

千 代

千 代

之 子

代 之

代 之

代

ナオ

春愁の大名時計遅れがち

たばこ屋に置く谷根千＊谷根千の地図

悠然と老いしカストロ来日す

はた迷惑な奴の大声

ぼろ市のまけろまけぬの熊の皮

返した金をまた借りる暮

二〇〇三・四月アトム＊アトムの誕生日

ファーストキッス宇宙基地にて

もう逢へぬ逢つてはならぬ人を恋ひ

紐をさらりとほどく手品師

少年はメジャーリーグを夢に見て

「雨降りお月さん」月へ歌ひぬ

金盃ナウに快気祝の新走り

家族こそつて帰るおくんち

売り切れてしまったミッキーマウス帽

本舗と元祖並ぶ煎餅

晩学の辞書繰る窓の花明り

流るる雲に耕しの人

＊谷根千の地図…谷中・根津・千駄木辺りの地図

平成十五年四月一日 首尾
於 新宿消費生活センター

千路達登代達千代登之達路達代之路登千

猫蓑庵明雅先生　ご逝去を悼みて

翁慕ひて

翁忌の翁慕ひて逝き給ふ

美髯白髮杖に外套

金米糖ほるとこぼるる縁側に

抜けてしまった乳齒投げ上げ

街路樹に懸かる弓張バス待ちて

同じ時間に出会ふ蟋蟀

オペレッタ芸術祭の靴が鳴り

モデルルームをはしごする彼

当り前だけど朝食つくる夫

昨夜の余韻を漂はす背

それらしきフェイクの系図買ひ求め

山賊もゐる開発の村

兄さんもきばれとちよかで注ぐ焼酎

月をめがけて鉄砲魚撃つ

旧仮名のぼろぼろの辞書繰りながら

特盛カレーぺろり平らく

巣づくりに花の一枝を脚へ来て

主悦は女性義士祭の列

近藤 守男 捌

倉本路　近藤守男　山口美恵子
式田恭子　峯田政志

子恵男　子恵男　子恵男　志恭男　恭志路　恭志路　志恭路　志恭路　志恭路

ナオ

塩田の働く影に春疾風

顕微鏡よりのぞく検体

野の草も新種ばかりがはびこりて

頻りに起こる変な盗難

占ひとお札納めが癖になり

無理に止めるくっさめの口

さりげなく抱けばするりと向きを変へ

愛の重みをもてあます昼

ケータイの着信音のやぶる夢

異人種の町悩む子育て

それぞれのお国言葉で賞める月

ナウ
稲架の間に眠る捨て猫

秋播きの種子を話題の湯治客

つんどく
積読処分未だ成らざり

彫像の会長今も睥睨す

小節まはして唄ふ民謡

花の下歓呼に手を振るメダリスト

新居の門の蝶のひらひら

平成十五年十月二十三日 首尾
於 小金井市 栗の会

志 男 恭 恵 志 路 恵 路 志 恵 恭 路 恵 志 路 恭 男 恵

キューポラの街

キューポラの街の高塀木守柿

淡き陽を追ひ移る笛鳴

橋上に見知らぬ人の礼受けて

元気いっぱいはしゃぐ子供等

悠悠の湖照らす望の月

刈田に並ぶ稲塚の翳

温泉の湯煙りに咽せ秋深む

指折り数へ選ぶお土産

仮縫のドレスのトレーン彼が持ち

晴れの日思ひ固く抱き締め

栄転も親の介護で別暮し

時計がほんと打てばお二時

月涼しキューピーさんの大きな目

桃桜忌過ぎやがて河童忌

愛猫を膝にのんびり見るテレビ

アテネの空へジャンプアタック

花見客一花一弁にある思ひ

いささか酔うて霞む故郷

権頭 和弥 捌

權頭和弥

佐野とし子

中和枝

田村昌江

岡村和可

子

枝

江

可

子

枝

弥

江

可

子

弥

枝

江

ふらここに稚なごころの懐かしき

山の麓を走るSL

病院の廊下に名画飾られて

白いお化けがにつこりと立ち

選挙戦どちらに向くか酉の町

世界遺産に難波文楽

袴のやうに張つたる肩パット

あなたの肌はいつもすべすべ

職場への恋のメールは隠語でね

時代小説伏せ字ばかり

新米を炊いて供へる馬頭尊

すだくがちやがちや崩る月光ゲ

声上げて窓に顔寄す夜学生

荷籠滿杯飛ばす自転車

老人会デイズニーシーへご招待

健康器具を通販で買ふ

綿雲に溶けゆくばかり花大樹

春の時雨がちよつと心配

十五年十一月九日 首尾

於川口そごうダリアルーム

福田太ろを

江 弥 枝 子 可 江 子 枝 可 江 を 枝 子 可 江 枝 子 可

漱石忌

坂本 孝子 捌

海苔焙る遠火強火や漱石忌

初雪ふはと眠る黒猫

大道芸ビエロは赤い鼻つけて

いつも息子にたのむ車庫入れ

新涼の月へと続く滑走路

上衣の袖にとまるきちきち^ウ

棟梁の拍手響き今年酒

四光五光とめくる凄腕

YESでもNOでもなくて共に棲む

手紙の束を燃やすジェラシー

ヨルダンの西の争ひ止まずして

乏しき水を惜しむ夜濯

幽霊となめくじ長屋の月を賞で

買ったら捨てる本の腰巻

地下鉄の居眠り女肩重く

応と組止め左掛け投げ

野遊びの果てたる後は花の雨

候文に蛙鳴き交ふ

大窪瑞枝
井上蘭
原田千町
豊田好敏
井上鶴鳴
生田目常義
坂本孝子

枝石町 鳴町 枝石町 同 義敏 同 義敏 同 鳴町 枝石町

ナオ

天領の由緒を偲ふ雛飾り

女系三代家業律儀に

放浪の火宅の人の便りなく

この年に聞く訃報数々

碑のごと冬林のサンピラー

嬰の洗礼に集ふ村人

つひ義理で連帯保証印を捺し

轆轤を蹴つて回す世の中

奥方がひっそり通ふラブホテル

至福の喘ぎ鞭と蠟燭

桂男へ笙と笛とを仕り

ナウ
ダリの絵を見る晩秋の巴里

野の色^{ナウ}の黄からセピアへ褪せてゆき

嘴太烏何の相談

法螺吹きの小使いさんも定年に

切手蒐集それがご自慢

山門は万朶の花を抜きんでて

ボートレースに上がる歓声

平成十五年十二月二十一日 首尾

於 緑華亭

枝 敏 町 敏 枝 義 町 石 同 枝 町 敏 義 鳴 敏 石 子 鳴

ナオ

高らかに金管楽器響く春

豪腕投手呼び出されけり

ミネソタの畑で乗りしコンバイン

降霊会に持つてゆく石

ざりがには深い水槽ゆつくりと

借りて返さず書を曝しある

折檻の後は午睡の幼な妻

ガラスの靴を置いてきました

メルヘンの王子はみんな木偶の坊

四十分と決めた歯磨き

月面を虫のごとくに月面車

ナウ

冬支度する気にもなれなく

草の穂を咥へて炊ぐ銀のシャリ

親を搜して迷ふ子鼠

切迫の法華太鼓がはたと止み

●の目玉が揃ふサイコロ

幾世にも伝へし歌と花の地図

耕し初むる新墾田の土

あらきた

平成十五年五月十六日 首尾

於 四宮ブルー桃径庵

齋 恭 悟 齋 恭 悟 恭 齋 悟 齋 恭 悟 齋 恭 悟 齋 恭 悟

子規庵や

子規庵やあちこちにある秋蚊遣

豆名月の届く文机

夜食とる後姿の大人びて

ウォーキングの靴を新調

清流にひるがへりたる岩魚の斑

青葉がぐれに歌の聞こゆる

図書館へベストセラーを予約しに

夫の肩書まだ役に立ち

綿屑を取って上げしが縁となり

邪魔にならない距離におくひと

「沸きました」風呂の湯加減全自動

雪ころがしの少し泣きべそ

するめ焼くストーブ列車月に向き

山門抜けて葷酒がぶがふ

藍染の匠三代目は次男

秘中の秘なる口伝聞書

警察犬準備体制花の道

小鳥の卵そつと見守り

下鉢 清子 捌

桑原美津

佐藤良彌

下鉢清子

松島アンズ

河内薫

吉村ゑみこ

山田喜美枝

津

彌

清

ズ

薫

こ

枝

津

彌

清

ズ

ナオ

何となく人なつかしき星おほろ

ビューポイントを選ぶロケ班

俳優が州知事となるU・S・A

馬鹿の壁なら簡単に越す

仮りの世に真実一路の向う見ず

行灯水母の紐のゆらゆら

葛切りを妻に付き合ふ甘味店

入り婿ぐらし我慢忍従

懺悔聞く牧師の耳の遠くなり

サグラダファミリア石穿つ音

月さして橋二つ三つくぐりゆく

ナオ つづれさせさせ衣ととのへ

菊人形武蔵小次郎揃ひぶみ

同窓会で先生の真似

ユビキタス時空自在に操りて

魚介豊かに島の明け暮れ

整花影婆娑とありにけり

歩行者天国草青む頃

平成十五年十月十二日 首尾
於 柏市光ヶ丘近隣センター

津 枝 ゑ 薫 ズ 清 彌 津 枝 こ 薫 ズ 清 彌 津 枝 こ 薫

猫蓑庵明雅先生に捧ぐ

筆は一本

脇起り

筆は一本箸は二本や秋の暮

月の舟には白哲の人

風の道色変へぬ松凜として

ワングル部員交はす挨拶

ピンバッジ帽子ぐるりと取りつけし

蜘蛛の囲光る忘れ鉢など

梅を干す屋根の上から木遣唄

どんなもんだいこの神輿胼胝

キューピッド矢鏃の先を探りたる

見合ひ写真の過ぎた修整

品川で乗り遅れたる新幹線

隠しマイクは番記者の技

寒の月天地無用の段ボール

蒲団のなかに哲学をして

割り勘の数字が割れぬ計算器

市の買ひ上げし頼朝の墓所

ばんばりを花の大路に点しけり

ごんずいばかり釣ってきた父

鈴木 美奈子 捌

東 明雅

鈴木 美奈子

長崎 和代

倉本 路子

大島 洋子

登坂 かりん

林 鐵男

篠原 達子

洋代

男

代

達

路

男

ん

洋

達

達

ナオ

細繩に青海苔吊す海女の庭

ジエンダー・バイアス知らぬ太腕

この頃はタガログ語にもやつと慣れ

虜囚つくりし演劇集団

鴉の子臉の母はどこにゐる

洗ひ髪から甘き香のして

仇な恋アドレナリンが分泌され

ひとしきり泣きひとくさり妬く

年越しの蕎麦は熟年繋ぐ糸

「とろり」を勧め聞書の夜

ログハウス出湯を引きたる月の窓

ナウ
国道標識鹿にご注意

時間きて気合いつぱい相撲取

正座で治す膝の屈伸

ユビキタス電子の波にのつてくる

農具市には口ポットも立ち

幹に寄り花の囁き聴きをりぬ

肩車の児揚げる連風

平成十五年十月二十六日 首尾

於 新宿 滝沢

路 男 路 洋 奈 代 人 代 男 達 洋 路 奈 達

啓蟄や

文 音

鈴木 了斎 捌

啓蟄や蓋のしまらぬ荷が届き

両の隣は野遊びの留守

母の弾くオルガンの音うららかに

鉛筆の尻囁る癖あり

地下鉄の入口月が切る切符

摩天楼から仰ぐかりがね

テ^ッーブルをワゴンに乗せて栗の飯

痒いところに手の届く人

冷静になつておとなの恋の道

バックギアのないレースカー

日曜日河内訛りの叔父が来る

月皓々と夜咄の屋根

ポーナスの明細表を壁に貼り

あつと驚く大凶の札

匙加減酸いも甘いもそのままか

検温時間幼児病棟

夢の中乗って流るる花筏

微塵の星にうらうらと住む

式田恭子
鈴木了斎

ナオ

告天子翼を焦がすところまで

ずらりと並ぶ透明の鍋

百円でこんなものまで買へるとは

空地にたてる細い看板

犬友達知るは犬の名ばかりなり

ナイター済むとしゃがれ声だね

捨てられた麦藁帽子風に舞ひ

私の美貌何よりの罪

ギロチンへ歩みつつ書く愛の詩

お忘れものは飾戸棚に

鯖雲の端にまぎれる昼の月

ナウ

べったら市の甘いべったら

石ひとつ投げて物の音いよ澄み

確かなことを探す毎日

新しき墨の匂ひが厨より

背を伸ばしゐる猫の長さよ

はなびらは片敷く袖の絵にまぎれ

春夕暮を衛士の篝火

恭 齋

平成十五年四月十二日 起首

平成十五年七月三十一日 満尾

秋の蝶

秋の蝶玻璃に触るればと消ゆる

月が雫をこぼす残菊

今年酒取材の記者も酔ふならん

縦書横書名刺二種類

共通点こんなにあると姉妹都市

冷房加減省エネのビル

若きは器械使つて日焼けして

鎌倉婦人悪の手ほどき

僧坊を浄め佛打ち払ふ

スローなブリを弾く三味線

兵隊を出すか出さぬか被爆国

年金論議風の吹く

狸毘仕掛けて仰ぐ丸い月

四十十川に沈下橋あり

抽籤で当てたふるさと小包便

WEBデザイン講習を受く

薄紅の絹刷きたる花の雲

烏帽子直垂うらら官人

副島 久美子 捌

副島 久美子

鈴木 美奈子

百武 冬乃

峯田 政志

佐古 英子

梅田 志實

志實

乃

同

奈實

英

乃

英

奈

同

實

實

ナオ

蛙聴く史前の帰化種連綿と

上湯下湯の街道の宿

循環系診察丁寧かかりつけ

車保険を義理で取替へ

パリダカに箱師親娘も乗り込んで

猛犬注意片蔭の小屋

青簾隣は何をするひとぞ

引き起こされてまた抱き合ふ

DNA知らぬが仏亭主殿

馴染みの店の練切の味

笛太鼓月の色増す踊の輪

名簿に斜線記すやや寒

ナウ

茸とり当り年とて持山に

村の境に祀る水神

コンビニで支払ひ済ます電気代

独り酌む酒甘口の佳き

樹木医の枝に古木の花開く

途切れて続く遠足の列

平成十五年十月八日 首尾

於 池袋 滝沢

英 奈 志 英 奈 久 奈 志 同 實 志 英 奈 實 英 久 乃

祝
爽庵庵宗匠立机

有難き沙汰

くつきりと雪富士新宗匠路子

冬の佳き日の有難き沙汰

みづうみに航跡長くひろごりて

取入れ口に群るる小魚

月まどかプラズマテレビ届けられ

ぐつぐつ煮込むライマビーンズ

牛どちに味噌を舐めさせ牧閉ざす

手を添へられて習ふ運転

湯上りの君の香りにくらぐらし

仇討など忘れ申した

この頃は迷走神経お疲れで

アマルナブルー残る壁面

列柱の一本欠けて月涼し

髭の男が躍らする蛇

久々に帰るふるさと風ばかり

古伊賀水指銘蹲る

初花のひと枝挿され調理室

母を離れぬ入園の吾子

染谷 佳之子 捌

染谷 佳之子

倉本 路子

長崎 和代

竹田 登代子

佐々木 有子

篠原 達子

山本 千代子

有

路

之

登

代

千

達

同

有

登

路

ナオ

西の京仏めぐりものどらかに

ガイドブックで探すお土産

びつたりと閉らぬ扉尻で押し

そのなりゆきは雲にまかせぬ

おでん酒蘆生の夢を知る齡

本日休診底冷えの街

顔だけで惚れちゃいけない銀流し

わたしの方がずっとうはてよ

トランポリンに乗ってハートを弾ませる

犬はバウバウ猫はミュウミュウ

監督のため出し続く真夜の月

早稲のおにぎり差入れにして

ナウ
ひしひしと戦の予感秋しぐれ

駐輪場はいつも満杯

がま口につけし小鈴のちりと鳴る

たいせつにする棕櫚の手箒

花衣脱げば花びらこほれけり

ヴェルデの森に絶えぬ囀

平成十五年十二月十日 首尾
於 箱根ヴェルデの森

達代有千路同登路登千達千達千登有之代

立春や

文
音

武村

利子

立春や雲追ひかける風の足

金縷梅咲いて静かなる庭

コンサート集ふ仲間のうららかに

バス時刻表ポケットの中

名物の月見団子は売り切れて

隣近所に配る御所柿

和服には似合ひの蛇の目古都は秋

バツイチなれど男運よき

婚の荷に父母も積みお嫁入り

吉祥天を祀るこの寺

蝉の声特訓塾へ通ふ子ら

緩く目隠し西瓜割りする

湯治場に残る暑さの厳しくて

めつちや悔しい破産見る月

太閤の千生りだよと香具師口上

動物園に猿が増え過ぎ

花の下フォークダンスで交流会

復活祭のほろ酔ひの人

武 東 東 杉
村 山
利 郁 明 壽

雅壽郁利壽雅利郁雅壽郁利壽雅子子雅子

ナオ

三脚をかつぎのどかにひとり旅

ラインの流れ街に灯ともり

現代のファウスト博士いまどこに

高等数学悪を導き

闇汁に銀行株を打ちこんで

頭と骨になりし鮫鰐

抱かれ癖脱ぎたがる癖をさな妻

せんばこいさん万事はんなり

夏の月高値つけたるゴッホの絵

薩摩切子が宝石に見え

老病と孤愁の暮らし二十年

またふつくと稚のほつぺた

ダイエット・エアロビックス・太極拳

「宮本武蔵」読み返すなり

夢紡ぐお茶の一杯和やかに

ひねもす歌ふ籠のカナリヤ

相聞の短冊結ぶ花の枝

ペアールックを笑ふ山々

平成十五年二月一日 起首

平成十五年二月十八日 満尾

郁 利 雅 壽 郁 利 壽 雅 利 郁 雅 壽 郁 利 壽 雅 利 郁

都大路

橘 朱鷺子 捌

雨けぶる都大路や花の冷え

老舗の窓に飾りたる雛

鶯に幼な声の重なりて

満場一致賛同の挙手

記録的下ミノ完成月昇る

破れジーパン決まり爽やか

牧閉ざし牧童しばし立ち尽す

見知らぬ土地で固く寄り添ひ

同棲のままごと遊び夫婦碗

ケータイ今は動画盛況

居ながらにブランドものをまとめ買い

呼名に魅かれ極楽魚飼ふ

前垂れの赤き地蔵のおだやかに

年越し蕎麦に月浴びる列

ぼきぼきと氷柱落しに興じつつ

単線電車に憶ふダブリン

妖精の来るといふ丘ヒース咲く

蜜カラどもの酔ひの春眠

橘 朱鷺子
本 田 弥 生
吉 藤 一 郎
蒲 原 志 げ 子
田 村 満 子

朱 生 郎 志 満 朱 同 郎 志 満 朱 生 郎

ナオ

海雲桶乱れし糸をたぐり寄せ

箸と鉛筆同じ持ち方

刀自様は明治の気骨端座して

女系家族の続く六代

夢に出るひと皆眉目麗はしき

男は辛し寅さんは良し

牛久沼自在に描く河童の図

辣蕪頭の取的の下駄

代議士の得意は「秘書のやったこと」

清らの月の照らす神域

矛と盾人知をせめぐそぞろ寒

コリコリコリと鯔の臍食む

ナウ

お宝は信ずれば真菟集家

私誰の子母さんに訊く

病癒ゆと竹馬の友の弾む声

パチンコ店の雇ふチンドン

日本一世界一ですおらが花

珍種奇種あり繚乱の蝶

平成十五年四月二日 首尾

於 鎌倉おんめ様

志満朱生 志満朱生 志満朱生 志満朱生 志満朱生

衣張山

田村 満子 捌

衣張山政子伝説冬紅葉

雪かと紛ふ初霜の白

新メニユーテストを済ませ店頭に

部活若者挙げる大声

覗き込む地図のまん中月明し

橋のたもとにいとゆふの飛ぶ

どぶろくに酔ひしれ果てて千鳥足

急いで止める風呂のガス栓

移り香をシュシュッと消して朝帰り

猫と同じ眸で見てる妻

代行の輸入盛況財をなし

お江戸に多き庭のお稲荷

マヨラーも混り次々手巻鮓

月浴び生るる蟬をカメラに

開発の新薬やつとめどが立ち

爺の仕事は雑誌切抜き

岩角に当たりて乱る花筏

さんだらばっち坐る捨籠

田村 満子
橋 朱鷺子
橋野 代々子
吉藤 一郎

朱郎 満郎 代朱郎 代朱郎 満郎 代朱郎 満郎 朱郎

ナオ

農具市これぞと機種をやつと決め

時間をきめて励むりハビリ

アンデスの人骨ケーナ吹くならん

教授の淹るる苦き珈琲

寒昂ささら電車の突き進む

囲炉裏の周りひとり割り込み

将来を小指からませ誓ひ合ひ

着痩せの女の恋多きこと

理由知りの戯作者にんまり楽屋裏

舗装の路に伸びる雑草

むら雲の風情も良けれ今宵月

ぷちんぷちんと秋茄子をもぐ

餌台に嘴太き鴿しめを待ち

ノーベル賞を胸に爽やか

渾身のスライダー打ち場外へ

他人知れずこそ修羅の来し方

武家屋敷北国の街花大樹

天へ届けと兄のブランコ

注・衣張山伝説―北条政子が鎌倉の山に白絹を張り巡らして雪に見立てた。

平成十四年十一月六日 首尾

於 鎌倉おんめ様

蒲原志げ子

郎 満 げ 代 朱 満 郎 げ 代 朱 満 郎 子 代 朱 満 郎 代

踏み入るや

長崎 和代 捌

踏み入るや眩きに似て木の実降る

月白ほのと渡る雁

点呼受くボースカウトさはやかに

誰の靴やらサイズ29

塗盆に盛りたる干菓子こまごまと

たっぷり水を打ちし坪庭

真砂女^ウ逝く身じろげば鳴る單帶

酔ってもいゝよ今日は聞き役

さりげなく寄ればするりとかはされて

屋根裏部屋に隠すへそくり

自家製のチーズを齧る鼠の子

カンパネルラの列車空ゆく

神楽笛月に向ひて嫋々と

つぼはそこだと父の寒灸

パソコンでアフリカの地図検索す

出だし決まればあとはすらすら

四世代居並び写す花の下

幼なころがる若草の土手

長崎 和代
染谷 佳子
篠原 達子
竹田 登代子

達 之 達 登 之 登 達 登 之 代 登 達 同 之

ナオ

柳蛇蛇の隙間をでついたりつ

ばったりと会ふ夜逃げした奴

流行のアルマーニなど着こなして

耐性菌に負ける新薬

生涯を狸々蠅の研究に

朝昼晩と冷やしさうめん

愛してる愛してるよとそればかり

どきどきわくわくもぞもぞののに

スキヤンダル響く人あり総選挙

つひに知恵の輪解けぬ老僧

端溪に水ひとしづく月を待つ

ナウ 鴟の早贄竹垣の先

運動会マイムマイムの賑やかに

撮ったビデオの中は空っぽ

飲み干して洋酒の瓶を飾るなり

露地の敷石濡らす糠雨

山脈の奥の山脈花満ちて

二泊と決まる春惜しむ旅

平成十五年十月七日 起首

平成十五年十一月十一日 満尾

於 新宿消費生活センター

佐々木 有子
登坂 かりん
倉本 路子
山本 千代子

同 之 達 之 登 之 達 之 有 千 之 代 千 路 ん 有 千 之 代 千

あかざの杖

原田 千町 捌

行く秋のあかざの杖もさびしかり

虫の音を聞く沓脱の石

野外劇プロローグから月も出て

キャンディーひとつ呉れる幼児

円周率おほよそ三といふことに

籐椅子ぎしと心地よき伸び

思ひきり快速の艇走らせむ

裕次郎様今もアイドル

誰だっけ窓越しに来る投げキッス

碧き眸のまろき黒猫

貴婦人の絹の裳裾の波打ちて

冬の館に入れば静謐

月凍つる最果ての街稚内

成吉思汗鍋準備完了

候補者の語り尽せるマニフェスト

郵便でないメール便受け

花吹雪ゆつくりと押す乳母車

日もやはらかく秘仏開帳

原田 千町
生田 常義
中野 昌子
関口 靖子
鈴木 千恵子

常 靖 昌 惠 常 惠 昌 惠 靖 常 惠 靖 常

ナオ

揚雲雀親不知またやや疼く

ナボレオンさへ参るお話

サラリーマン持て余したる成果主義

ほうと眺める遠い端山

琉金のやうな遊女の故郷恋ふ

ホストの為に開けるドンペリ

結晶のギリシャの塩でパスタ茹で

円卓協議成るか成らぬか

激突の相撲十番寒稽古

鬚仙人に習ふ壁抜け

メビウスの帯を辿れば月耿と

ナウ
日展搬入油厚塗り

初潮の押し寄せて来る九十九里

お互ひ様に老の明け暮れ

大吉の御神籤大事懷に

ワルツに合はせスキップをする

猿が出ててっぺんに坐す花大樹

風もふはりと蝶々の夢

平成十五年十一月二日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

靖 町 恵 同 昌 常 靖 常 恵 常 同 昌 同 恵 常 恵 靖 恵

佛
洌
健
悟
捌

ナオ
延々と独り尻取り続けをり

武蔵遅参すこれぞ兵法

アメリカも学んでみるといいのだが

マックシェークのつまるストロー

不惑とは惑ふ四十路のことならん

(笑)の多き恋文

夕焼の海に帆船を出すあなた

丸いほっぺをつつく幸せ

歓声も聞こえなくなる輪の中に

百万本の矢を許す牛

黒々とバプロピカソの月今宵

焼いて並べて焦げて秋茄子

父さんに酸漿摘んで帰らうか

仕立て上りの背広嬉しき

酩酊の一升瓶とご相談

銀河鉄道発車オーライ

花の山暮れてさざめく気配あり

蛙が跳んだ池のしづけさ

春
宮
淳

好一彦 彦庸 彦那 一太 那好 直乃 一乃 太悟 庸

平成十五年十一月二十四日 首尾
於 中央大学哲学科研究室

うぶぎぬ

文音

松島
アンズ
捌

初産のうぶぎぬ縫ふも年用意

掃き納めして清らかな窓

休耕田散歩の犬と見まはりて

SL撮す人に声掛け

十五夜の月に真向ひ観覧車

さらさら動く瓶の数珠玉

ベテランの目利きたよりに茸狩^ッ

神出鬼没現職のデカ

下町に整骨院を開業し

あんたの吐息くすぐったいの

姉妹好きなタイプは正反対

ブロッケン現象登山帽振り

昼月をめざし飛び立つ星鴉

宮沢賢治輪読の会

僧形の一人寡黙見じろがず

大吟醸は佳き香りなり

打ちかへす湖の波花枝垂れ

櫂のしづくに映る遅き日

松島
アンズ
吉村
ふみこ

ズ　こ

ナオ

家計簿に蝶蝶見たと記入して

パソコン指南手取り足取り

顔パスでチェックインする国際線

小半日ほどできた禁煙

底冷えの階段筆筈きしむ音

お帰り遅し鍋奉行殿

うっとり君の言葉に酔ひしれる

愛の思ひ出芸のこやしに

モンパルナス画学生佇つ月の道

紅葉かつ散りケルビムの像

萩茶碗服加減よき風炉名残

ナウ
とうに越えたる父の年齢

ノーサイド審判の笛高らかに

皆に配る缶のコーヒー

行列は路地の奥へと曲がりゆき

暗渠の風も海へ海へと

花片で名前を綴る遊びせん

ギター爪弾く陽炎の原

こ　ズ

平成十四年十二月十九日　起首
平成十五年一月十六日　満尾

お台場に春探訪の観覧車

侵入船の弾痕の錆

ミサイルの届くとどこかぬ姦しき

優先するは格と式なり

埋火の伏籠にこもる蘭奢待

緑の髪の魔女の虜に

青白き柩の君に接吻を

さはさは風に揺らぐ道草

遠き目をしてぴんと立つ馬の耳

前後不覺に眠りこけたる

囊中の米三合で足りる月

囲炉裏欲しいと老いの呟き

笑はない子に羽ばたける沼太郎

まだ生きてゐる縄文の種

鈴のごとハープシコード鳴り続け

ズツクの靴に詰め込みし夢

秦嶺の彼方に忽と花の村

昼餉の煙昇るうららか

平成十五年七月八日
起首

平成十五年七月二十九日 満尾

草 龜 良 草 龜 良 草 龜 良 草 龜 良 草 龜 良 草 龜 良

猫蓑庵明雅先生 追悼

時雨るるや

時雨るるや教えのペンのライトブルー

はらりと散りし庭の山茶花

交差点鼓笛の列の過ぎゆきて

ママのポッケにいつも飴玉

やつとかめ待ちくたびれし友の月

水車ことこと廻るやや寒

新薬^ウを敷きし木箱に子兎を

ただ優しさに飢えていただけ

息とめて唇うける風のなか

恋は秘かに恋は一途に

ミステリードラマ見るのが日課なり

タランチュラの眼ひかる新月

砂遙か独裁者棲む砂の城

任せられぬと論客は酔い

呼んでみるいまは不在の弥勒佛

むらさきいろに染まる山の端

三代の家業を譲り花の旅

吾平餅売る旗のうららか

矢崎

藍 捌

矢崎 藍

柿本 ときよ

稲垣 渥子

由川 慶子

間瀬 芙美

加藤 治子

小野 芳梅

八木 聖子

と

小園 好

繁原 敏女

長坂 節子

黒木 美代子

佐久間 然

山口 元

梅

藍

ナオ

鯛網の掛声太く響かせて

背なの赤子のよく眠ること

ささやかな幸は半額シールから

政治家どもの不和と雷同

とき至りぼんと宇宙へ跳ねた鞠

外反拇趾の疼く街角

お目もじのかなわぬ君と知りながら

光源氏の冬ざれの嘘

あの猫の二重生活伸びをして

健康茶淹れ持ち歩くらん

明月のおもかげやさし父の墓碑

ナウ 俳諧大道紅葉絢爛

お若いのなかなかやるのう文化祭

異常気象のつづくこのごろ

エーゲ海黒衣の女白い壁

BGMに春の夢みる

花の宴お髭の膝に柳樽

ついてはなれて遊ぶ蝶々

伊藤良

谷本守

枝敏 美元 渥と 藍慶 美好 重渥 然節 聖節 治

平成十五年十一月十八日 首尾
於 豊田市 野島

旅心

吉藤 一郎 捌

小春日や渚に立ちて旅心

ちよつと斜めに被る冬帽

青き壺画廊の隅を飾るらん

三毛猫眠る長椅子の上

月齡を指折り数ふ望くだり

兄に習ひてひよんの実を吹く

海野宿駒つなぎ石に秋深む

思案しながら彼女素通り

コーヒーに媚薬一滴たらし込み

抱きて潜む紫の部屋

辻口にお尋ね者の御触書

マニフェストでも読んでおやりよ

月灼けてイラクに兵も出し難く

葦原蟹の脱皮する頃

幼児期の風景ふつとよぎりゆき

甘いお酒の味は辛めで

ペタンクの作戦成功花浴びる

胸の十字に祈るうららか

吉藤 一郎
本屋 良子
橘 朱鷺子
本田 弥生
蒲原 志げ子
大窪 れもん
田村 満子

郎 良 朱 生 志 満 郎 良 朱 生 志 郎 良 朱 生

ナオ

佐保姫の裾ひろがりて輝く野

地平めがけてハーレイを駆り

今まさに落暉両掌に受止めて

天狗が出ると祖母の口癖

妻問ひの戸をたたく音ひそやかに

筆先嚙んで別れ文書く

風花と見ればいつしか雪しまき

托鉢僧の歩む里山

憂きことの多き世なれど慈しみ

また繙ける阿Q正伝

城の月鬼の捨子の鳴くといふ

ナウ
馳走されしは氷頭膾など

村芝居おひねり投げる雨霰

サウナ打たせ湯揃ふ温泉

クレッシェンドデクレッシェンド楽流れ

回遊式の庭にあそべる

呼込みの看板娘花見茶屋

載せてのどけし手乗り文鳥

平成十五年十二月三日 首尾
於 鎌倉おんめ様

朱郎生良ん志生朱良郎志ん朱生郎良ん志

源
心

梅の実

鶯宿梅待ちかねし実の付きにけり

卯月曇は既に三日目

カラフルにビーズの鎖編みかけて

珍しく見る料理番組

蠅^ウ螂が斧立てている裏の垣

焼けぼっくりが捨てられし月

抱かれても他人のふりの秋の朝

白い夢猫侍らせており

新聞を賑わしている教祖様

町工場に回る旋盤

玉子酒ぼけはまだだと主張する

やっとありつく予約チケット

名古屋城お堀の花の爛漫と

餡がたっぷり旨い草餅

稲垣 渥子 捌

由川 慶子

間瀬 芙美

稲垣 渥子

黒木 美代子

渥

慶

芙

慶

芙

矢崎

渥

同

美

芙

ナオ
憧れの春探しゆく汽車の旅

良くも悪くも人の一生

古巣では持ち上げられる好投手

土塀伝いに茂る青蔭

教会に住むと噂の吸血鬼

足音だけの恋が始まる

角巻の道踏み外す他はなし

冬眠さめて月がぼつかり

戦場のピアニスト弾くノクターン

袋の中のパンのかたまり

ナウ
耳立てて野良犬二世堂々と

蛇をお供にくぐる山門

花が散る汝とわが身の刻が散る

うららかな日に流す笹舟

平成十五年五月二十日 首尾
於 桜花学園大学

美 藍 慶 芙 藍 渥 芙 渥 慶 美 渥 芙 美 慶

行く秋

行く秋や葛布の上の曲り尺

つづれさせ鳴く植込みの蔭

酌み交し名残の月を待つならん

バイトで買ったブランドの靴

最南の島へ旅立つ神の留守

鯨が跳ぶを見よと誘はれ

猫の目のやうな女にじらされる

小姑三人やたら美人で

通販のカタログ山と積み重ね

また剥いてゐるチョコの銀紙

今日もまた止ったのかいJ R

あっちむいてほいこっちむいてほい

墨堤の花に荷風のソフト帽

つちふる街に大英国展

金久保 淑子 捌

金久保 淑子

吉村 弘みこ

古賀 一郎

伊勢本 如代

弘

郎

代

弘

郎

弘

郎

代

郎

弘

機内食春の苺も配られて

開いて見てるノートパソコン

スカウトのリトルマツイを狙ひをり

救心丸を探す重ね着

この度の法王様は稚児好み

夜毎に通ふ抜け穴の先

テロップの地震速報震度四

峠の風に樹木のざわめき

月白の歩荷は杖に立ち憩ふ

串刺し鮎でちよつと一杯

ナウ
手枕の夢に初孫ほほゑみて

どこへ行くにも紺のジャージー

花吹雪オープンセットの村芝居

殿様蛙かしこまり居る

平成十五年十月二十九日 首尾

於 東京ウイメンズブラザ

執筆

代 ㊦ 郎 代 同 ㊦ 淑 同 郎 代 同 ㊦ 代

梅雨晴間

友よりの句集うれしや梅雨晴間

水琴窟の涼やかな音

カレンダー予定ぎつしり書かれて

孫の名前に候補あれこれ

月の道記憶の奥の太き声^ッ

横這のごと喰いつくす恋

これ以上赤くはなれぬななかまど

はったり利かす人生もある

すらすらと有事法案通過させ

禁煙破る宴会の席

見掛けより柔らか博多のぬれせんべい

一に辛抱二になせばなる

受賞式父亡き里に花が降り

あひる供する田打機の後

加藤 治子 捌

加藤 治子

佐久間 然

黒木 美代子

由川 慶子

同

美

慶

間瀬 芙美

同

美

慶

然

矢崎 藍

治

ナオ

おんふの肩にからから廻る風車

万景峰号荷下ろしをする

仏滅の悪い予感の黒電話

声張り上げて金魚売りゆく

別れても再婚話出てきます

髪の乾かぬうちに抱かれて

材木町川は淀んで流るのみ

ついに犬まで糖尿病に

残業のコンビニ弁当月寒し

スーツの下に薄い股引き

往年の野球選手も監督で
ナウ

孤独楽しみ車運転

花万朶市民の憩う秋田城

巢立ちの鳥の声のあちこち

平成十五年六月十七日 首尾
於 桜花学園大学

美 然 美 治 芙 藍 同 然 藍 美 治 然 治 慶

小名木川

小名木川よどみ流るる薄暑かな

風にはためく幟遠近

寄席囃子客の出足の如何ならん

自転車でくるビザの配達

交番で地図を広げる月の下^ウ

何か気になる冷やかな髭

愛の巢は手元不如意の秋刀魚焼く

蛇口締めても水の止まらぬ

弾痕の街から消えた宝物

大きな犬を寝かす絨毯

ワトソン君間もなく来るよ依頼人

トランプでするひとり占

末の子の目指すは花のお医者さん

お地蔵さんに持たす風船

上月 淳子 捌

上月 淳子

八代 婿

林 鐵男

関口 靖子

男

婿

靖

男

婿

同

男

靖

婿

靖

ナオ

指笛にかぎろへる道下りゆく

宿の主は元商社マン

協力隊若者たちの勇躍と

たまの休暇は落語CD

蠅虎本棚にゐる紀伊国屋

今度のバイトちよつと可愛い

いごつそう取りすがられてめろめろに

天狗になつてしまふ後朝

月凍てしゲレンデ一気に滑り降り

ウイスキー入りホットドリンク

ナウ
旧石器時代のらしき出土する

走り書きする白墨の文字

桜大樹来世の花も共に見ん

菜飯田楽名物の膳

平成十五年五月四日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

靖 淳 嫺 男 嫺 靖 嫺 男 靖 男 嫺 淳 嫺 男

青 柿

青柿や真夜の雨音激しかり

帰省した子の眠り健やか

電子手帳逆引き機能入るらん

頭の中の森羅万象

月^ッひそと核の隠し場見ているか

鰯焼いてる者の責任

紅葉狩誘いきれずにただひとり

顔文字ばかり愛の告白

翼なき般若心経空を行く

小葱を刻む朝の味噌汁

年金の目減りしてゆく借マンション

パラサイト居て長電話する

二胡の音のすべる川面の花筏

黄沙にかすむ新宿の街

佐久間 然 捌

稲垣渥子

由川慶子

佐久間 然

矢崎 藍

佐藤ふさ子

渥 然

渥 然

渥 然

渥 然

渥 然

渥 然

渥 然

渥 然

ナオ

夢まどか酔いもまろやか春の燭

猿の絵草紙浮世写して

故郷は知らず眉間の縦の皺

昼寝のあとにさっと行水

キヤミソール香りほのかに柑橘系

苦しい恋をまたも重ねる

別々に部屋を出て行く癖がつき

急に鳴り出す教会の鐘

月凍てて金具の疼く大腿部

猫に餌やるお婆さんの冬

ナウ

幽霊の転居通知の届きたり

パリもローマも自由自在に

棒高跳び地球を越すか花吹雪

おたまじゃくしの群れる溜池

平成十五年七月十五日 首尾

於 桜花学園大学

福井直

然 慶 藍 子 ふ 藍 渥 同 慶 藍 然 直 然 直

薄暑かな

走り着てシャツはためかす薄暑かな

祭囃子の子供連中

ちらし寿司母の手作り味よくて

狭庭の土のうすかげりする

月^ッ仰ぐ胸郭一杯瑞気満つ

ペダルを踏んで夜学生ゆく

そぞろ寒肩を寄せ合い黙のまま

君の鼓動が移る私に

SARSにて地球びりびりパニックす

口ついて出る南無阿弥陀仏

高い塔建つ前富士の見えたのに

ちつかたかたと名も知らぬ鳥

幼稚園花の吹雪の舞いあそぶ

双の掌包む蝶々

繁原 敏女 捌

繁原 敏女

佐久間 然

加藤 治子

長坂 節子

然

治

同

節

然

治

女

同

治

福井直子

仔豚もも色

売られゆく仔豚もも色青峠

螢袋のゆるやかに揺れ

新刊書サインの列に並びゐて

洗ひざらしのジーパンの膝

超^ウ高層あはひに泛ぶ宵の月

だらだら祭どこで落ちあふ？

絲遊の絡まるやうな二人連れ

大観覧車忽と止まりぬ

掏摸団が逃込みましたとアナウンス

若い駅員老いに優しく

海鳴りの丘に座したる盲導犬

DNAが示す未来図

花守の顔に似合はぬ几帳面

夢にてふてふ醒めててふてふ

篠原 達子 捌

篠原 達子

八代 嫺

松本 碧

鈴木 美奈子

山本 要子

嫺

奈

同

碧

要

奈

嫺

同

碧

ナオ

野を駈ける春の女神のコロラチュラ

オーガンデイーのカーテンの部屋

口いっぱい釘をふふみて床を張り

筍飯の前に浅酌

洗ひ髪くると巻いてトルコ玉

ヴェニス of 娼婦魂を抜く

悲母観音巡礼たちに笑み給ひ

金剛杖にお経隙なく

月冴えて阪神優勝好景気

鬼の禪締める輝

ゴ^{ナウ}隠居はインターネットに励みつつ

通販雑誌でいねいに見る

桜橋渡るかっぱれ花の風

ばらもん風の揚がる中空

平成十五年六月二十五日 首尾
於 東京ウイメンズプラザ

要 達 要 嫺 奈 碧 要 碧 同 奈 嫺 碧 要 奈

かなべて

かなべてこの道ゆかも初筑波

淑氣颯々松籟の韻

父と子の縁に広げる模型にて

垣の向かうでのぞく犬呼ぶ

伸びをするバイカルアザラシ夏の月

水着脱ぎ捨て丸太小屋へと

玉の緒の絶ゆるまでこそ抱くらめ

下駄の歯音の響く路地裏

文豪の生家の跡を経巡りて

ヘボン式にて綴る表札

三ツ星のシェフぞっこんのおばんさい

疏水に沿うて下る自転車

祝盃に花を浮かべて真昼なり

鶉となりし田鼠尾を振り

島村 暁巳 捌

島村 暁巳

木村 真呂

浅賀 丁那

山崎 一恵

山本 要子

花巻 珠枝

那

恵

呂

那

恵

枝

同

那

ナオ
薨打つけふこの頃の雨ぬくし

ホットケーキにバター溶かして

眠れぬ夜羊たちまで不眠症

だから言つたじゃないの母さん

檻樓市で買込んできたボロの山

どうともなれと彼とふぐ鍋

どさまわり
地方巡業座長に惚れて奈落まで

啄木鳥はシャイ樹突つき継ぐ

フィヨルドをふりさけみれば月登る

楓紅葉に金髪の子と

ナウ
澄みし声神に届けと聖歌隊

つましき膳を囲む石工ら

そと
太宰府の帥も愛でけん飛花落花

陽炎ゆらぐ万葉の丘

平成十五年一月十五日 首尾
於 ホテルサントリー東京

同 要 同 那 呂 惠 呂 要 那 惠 同 那 呂 同 呂 呂

鼻丸き地蔵

鼻丸き地蔵の笑まう木下闇

つまみ上げたる蟪蛄の子

絵手紙の孫の作品褒められて

シヨウウインドウに絹のブラウス

強^ウがりを言つて独りの月見酒

忘れ扇に募る恋情

冷まじき今日を限りと抱きあい

ドライカレーを大盛りに盛る

短時間で有事三法成立す

駆けずにおれぬ冬ざれの朝

僕の夢盲導犬の訓練士

机上の本にアンダーライン

賑やかにムーミン谷の花祭

高さ競つて揺らすぶらんこ

谷本 守枝 捌

稲垣渥子

繁原敏女

谷本守枝

渥

同

長坂節子

守

節

同

渥

同

小野芳梅

伊藤良重

渥

ナオ
のどけさを破り虫歯を削る音

薄墨色の東京の空

カザルスのチェロの低音響く窓

十万人の反戦のデモ

口癖に耳だけを貸し心天

やっと見つけた年下の彼

公園でただ逢うだけじゃ嫌なのよ

ちぎったボタンポケットの中

月蒼く狐が通る杣の道

無縁の墓に枯葉積もって

ナウ
網棚に置き去りにしたスポーツ紙

鈴木一郎全国にいる

花の客上り下りの屋形船

背筋を伸ばす春風の中

平成十五年六月十七日 首尾
於 桜花学園大学

梅 女 渥 重 女 節 渥 同 守 渥 節 重 女 重 女 重

至福かな

大根の煮あがる色の至福かな

雪積もる日の淨き文机

スケボーにはしゃぐ児の聲響ききて

胸のワッペンMとW

秋の蝶魅入られしごと月に入り

風炉の名残に誘ひの香

草の実が二人の仲を繋ぎとめ

サラブレッドにまた高値付く

郵便車曲がる坂道走り去る

鐘も涼しき聖母子の像

ルールのピラミッド口で待ち合はす

いくつ叶ふか古希すぎの夢

嬰鑠の杖にも白き花ふぶき

弥生の空は甕のぞきなり

豊田 好敏 捌

豊田 好敏

山田 華蔵

中野 昌子

鈴木 美奈子

山崎 一恵

筒井 紅舟

昌

同

蔵

奈

恵

蔵

奈

恵

ナオ

キムタクの似顔描きし団扇干す

新撰組は多摩に誕生

たまちゃんはお魚食べてお昼寝し

薬で治すアルツハイマー

懐手してちや石油はやらないぞ

間諜に化け盗む暗号

係累のなくて美貌で金持ちで

涙ひと粒こぼす艶然

黒南風も思慕の情けに疼く月

縁台将棋飽きもせず指す

食酒よき江戸指物の三代目ナウ

ミヤオリングルを孫にお土産

花満ちて幸若舞に陶醉し

山川草木なべて陽炎

平成十六年一月十八日 首尾
於 ホテルサンルート東京

奈 敏 惠 奈 敏 惠 奈 敏 惠 奈 敏 惠 奈 敏

大楠

大楠をいよよ潤す穀雨かな

尾ながの声のくぐもれる春

石鹼玉吹けばふはりと飛ぶならん

わたしの顔が空へ空へと

障子貼る座敷に母は正座して^ッ

秋の気配が釜に風韻

月の道人恋しくてあてどなく

少女期すでに透明となり

小指ほど硝子の猫の存在感

古事記の言葉ひととけば神

命のビザ杉原千畝書き続け

味覚臭覚正常な父

みずみずし出荷整ふ年の花

心あらたにしみる熱燭

中森 美保子 捌

中森 美保子

杉山 壽子

ナオ

新幹線あつといふ間に目的地

すは牛蒡ぬきピンチランナー

時計塔カクンと秒針動きだし

寒波知らせる有線放送

熟女らの生態模写で笑はせて

出会ひ衝撃分別が邪魔

並行の車がナンパ仕掛けくる

投網にかかる竜のおとしご

夕焼けをとつぷり消して月のぼる

喉越しのよき京の葛切り

ナウ
哲学書埋もれしまま幾年か

庭続きには海の広々

花衣だれもが姉のお譲りで

お下げに留めた蝶のヘアピン

平成十五年四月二十三日

平成十五年六月五日

於 熱田神宮龍影閣

起首
満尾

美 壽

ビスクドール

秋近しビスクドールの衣の艶

百合の香のただよへる窓

海鳴りの丘に脚立を据ゑつけて

ポケットにある買物のメモ

月明り独り言して通る人

踊り子の輪を囲む若き等

錦木の百一本にほださるる

ハートマークで埋める頸すじ

トロフィーは胴長犬のチャンピオン

元伯爵の愛用の匙

痛風に漢方談義きりもなし

日銀短観少し聳肩目

勘定が合うて花見の盛上り

麗らの中を急ぐ雛僧

百武冬乃 捌

百武冬乃

原田千町

鈴木美奈子

村田富美

梅田實

峯田政志

町

實

町

奈

志

同

奈

町

ナ
オ
地図を手に古城を巡る弥生盡

チエンバロで弾くバツハ組曲

なにがなし睡魔襲ふか食事あと

忍びの者のぼやく長梅雨

印を切るやうにまくなぎ払ふなり

惚れっぼいのは誰の遺伝子

祝言は蕎麦屋の二階と云ひ含め

牢を出るとてにほふ剃りあと

フセインは凍れる月にかくれんぼ

ペルシヤ絨緞並ぶ裏町

ナ
ウ
電話する約束ふっと忘れたる

老いの厨の小皿ちまちま

タンデムで登る坂道花ふぶき

鳶が笛吹く暮れかぬる空

平成十五年七月三十日 首尾
於 東京ウイメンズプラザ

奈 富 志 奈 町 富 實 町 奈 富 同 町 乃 實

巴里祭

濡れて来し少女が匂う巴里祭

街から街に架かる虹の輪

バーチャルの碁の友達を探しいて

毛長の犬にシャンブーをする

秋の月模様替えしたワンルーム^ウ

あなた恋しと蚯蚓鳴く声

結ばれて彼と一緒に墓参り

グルメの後の旨いお茶漬

百瓦増えた減ったと大騒ぎ

過剰勤務が事故に繋がる

テレビからはみ出している朝青竜

故郷の空やけに懐かし

神宮の回廊巡る花の庭

並んで食べる菜飯弁当

間瀬 芙美 捌

繁原 敏女

加藤 治子

小野 芳敏

間瀬 芙美

黒木 美代子

芳 敏

美 芳

芙 芳

美 芳

芙 芳

芙 芳

芙 芳

芙 芳

芙 芳

ナオ
金箔の五十三次麗かに

幕末藩士天を尊ぶ

夢に見た私の背中うふふふ

自販機で買う冷えた梅酒

今はもう大きな顔の古時計

爺と婆との想い出の海

密会の袂から洩る銀の砂

フィレンツェ行きの鉄道に乗る

凧にとぎすまされし二日月

送り狼獲物見定め

ナウ
かくれんぼ軒の凹みに身を隠し

幸せを売る乳母車いく

花吹雪馳せ参じたる白襷

人生謳歌闌の春

平成十五年七月十五日 首尾
於 桜花学園大学

美 同 芙 治 美 敏 芳 敏 治 敏 芳 敏 美 治

ことだま

ことだまを迎へ和するや初懐紙

春着のひとの派手やかな帯

羊追ふ牧羊犬は賢げに

撮影隊のジープ去りゆく

海の家バイト終りて仰ぐ月

冷房上げる下げるで喧嘩

ふところの深さに惹かれ一直線

御神籤大吉\$入れに秘め

パチンコに競馬麻雀ヘタで好き

癒しのブームグッズいろいろ

横浜の市長の若さ頼もしく

汽笛を聞けば出でて行く船

舞扇はらりと返し花の宴

薄紫にかすむ山々

松本

碧捌

松本 碧

内田 麻子

池田 やすこ

吉田 憲助

橋野 代々子

山田 美代子

代

麻

や

美

憲

麻

憲

代

ナオ

れんめんと江戸よりつづく義士祭

地下鉄線で縦横自在に

ひよいとでて凱旋門にぶつかりぬ

雪の尖塔ユトリロの白

水洩に胸のハンカチ差し出して

火の酒呷り狂ほしく抱く

老いの恋静かに深く湖色に

名月昇る定家忌の夜半

かまどうま紅旗征戎あざ笑ひ

銀のフォークを磨く新涼

ナウ

祖父と聴くジャズにボサノバ古き盤

造形墓石魚のかたちに

花びらを掬ひて遊ぶ子ら無心

風車売る法被若衆

平成十五年一月十二日 首尾
於 ホテルサンルート東京

美 代 や 麻 憲 や 碧 代 美 憲 や 憲

𠂇
短
歌
行
𠂇

猫蓑庵明雅先生 追悼

大いなる夢

大いなる夢遂げられて冬立ちぬ

悠悠と舞ふ初鶴の影

シテ柱謡ひの声の高らかに

イヤホンガイド外国の人

富士^ウ山の剣が峰より望の月

甲斐の里村冬近き頃

雪迎へしかと見届けご満悦

修学旅行の淡き想ひ出

美少年ともて囃されしがもてもせず

自慢のポルシェ少し錆付く

マルメゾン^{*}お抱へ庭師花に生き

鐘霞む野に静寂ながる

久保田 庸子 捌

久保田 庸子

五十嵐 譲介

河内 薫

桑原 美津

介

子

津 薫

子

介

子

薫

津

あいなめを狙^ナひし竿に又外道

地盤借金共に譲られ

美しき嘘か真か母の愛

月の雫が宿る白百合

ピーナッツとチーズ肴に冷し酒

陶芸教室角皿を焼く

虚無的なところにぐつと魅かれゆき

蘇州界限画舫姑娘^{**}

路次裏を三つ曲れば石の神

ジグソーパズル暖かな縁

花吹雪至福の刻を絶え間なく

春の泥はね子供らの靴

* マルメゾン…ナポレオンの后ジョセフィーヌの館
** 画舫…屋形舟

平成十五年十一月九日 首尾
於 柏市光ヶ丘近隣センター

薫 津 子 介 津 介 津 子 同 薫 子 介

百千鳥

長坂 節子 捌

その奥に藁屋根見えて百千鳥

裏の畑につくしどつさり

来客をまず招き入る雛の間に

首の飾りの華やかなこと

好^ウきですと君を見つめる一途な眼

抱き上げられて落とすマフラー

冴ゆる月学習塾を梯子する

赤ちようちゃんがゆらりゆらりと

ホームレス五七五と指を折る

夢うらないで探す幸せ

気も新たトレドの泉花の昼

カフェテラスから春が始まる

長坂 節子

同

高橋 良風

深津 明子

節

谷本 守枝

良

明

守

間瀬 芙美

節

由川 慶子

本を読む青年の顔夏隣

氷川きよしで演歌復活

サンガラスかける勇気の我になし

こっそり動く秘密警察

ペルシャ湾はるか戦禍の渦巻けり

ただひたすらに食べるピーナツ

気安さにお裾分けする月の庭

鯨情報はあてにならない

ホームランゴジラが打てば絵になるぜ

セコム付けてるゴージャスな家

おいでやす京の一会の花おぼろ

懐石囲む竹秋の寺

明 守 芙 節 良 守 明 節 慶 守 良 明

平成十五年四月十五日 首尾
於 桜花学園大学

二十韻

昨夜の雨雫

藤房やさらりと昨夜の雨雫

囀りのなか集ふ人々

風船を見上ぐる吾子の手を引きて

ポップコーンの匂ふ街角

マンション^ウの窓を隈なく望の月

思ひつのりて鳴らすほほづき

近松の死出の道行身に入みて

最終便を告ぐる案内

ウィルスとヒトの戦ひ果てしなく

風邪引きねずみスリッパの中

秋山 志世子 捌

秋山 志世子

松本 碧

古賀 一郎

篠原 達子

山寺 たつみ

碧

郎

み

達

同

ナオ
裏木戸でばったり会った雪女郎

大吉と出る恋のおみくじ

シャンパンとキャビアで祝ふ婚記念

月に飛び立つ茶翅ごきぶり

甚平にかんかん帽の啖呵売

恐いものなし肥後のもっこす

ナウ
極むれば諸礼停止の境に入り

加齢ですよとたはやすく言ひ

ジョッキーの掲ぐるカップ花吹雪

弥生山から望む弥生野

平成十五年四月二十五日 首尾
於 亀戸天神社

郎 達 碧 郎 達 み 碧 世 み 郎

難波津や

脇起り

難波津や田螺の蓋も冬ごもり

小春の野辺をかけめぐる夢

SLの汽笛次第に近づきて

宿題の子が卓を占領

月^ッ球儀耳はどこか大議論

秋振舞に猫も相伴

攫はれてみたきやうなるそぞろ寒

綱渡りゆく美少女に惚れ

つきあたり右へ曲がればカリブ海

パン屋の煙けふはまっすぐ

浅賀 丁那 捌

浅賀 丁那 翁

浅賀 丁那

佐々木 有子

原田 千町

島村 暁巳

松島 アンズ

町

巳

那

有

寺の鐘教会の鐘胸に鳴る^{ナオ}

地雷の原の兵に涼月

髭面が麦酒の泡をふつと吹き

大っ嫌ひが大好きとなる

ミステリーどんでん返し拙劣に

悪魔祓ひもありしスクエア

水しぶきあげて愛車を洗ひをり^{ナウ}

らつきよう餌に釣りし飯蛸

暮れ果てて山ふところの花明り

翁媼の集ふ炉名残

平成十五年十月十五日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

町　ズ　那　有　巳　町　ズ　有　町　ズ

月の下

呑み込まれさうに火星は月の下

天変地異に穴まどふ蛇

秋場所の全勝力士もう無くて

ずんだ餅ならぺろり一箱

若^ウきシェフスローフードを売りものに

バツゲームなどさてご用心

別れてもいいから結婚してくれと

詰めの甘さをまたつつかれる

着飾りて初金毘羅の人の波

赤くつぶらな冬珊瑚の実

小池 啓子 捌

小池 啓子

橋本 桂花

内田 麻子

桂

啓

麻

同

啓

桂

高瀬 美保

ナオ
助手席に古椅子を乗せ引越しす

女も胡座まづは乾杯

西班牙で拾ってきたの優男

ボレロを踊る汗の恍惚

臥して待つ月とメロンと香薷散

ふはふはの猫分割で買ふ

ナウ
何事の不思議なけれど明日が来る

蒼帝在す人工の浜

花筵ままごとの子は花あつめ

蚕飼の技を伝ふ里びと

平成十五年九月二十日 起首
平成十五年十月十八日 満尾
於 房連庵

杉崎 雅子

斎藤 久美子

麻

桂

岡山 朱藍

久

保

朱

雅

麻

大黒天

冬うらら顔の大きな大黒天

庫裡に来てゐる煤逃げの人

腸詰の糸きりきりと巻くならん

携帯電話オフにしてあり

昼の月湖畔巡りの馬車に乗る^ウ

彼の帽子に猫じゃらし挿し

木の実降る愛の讃歌の碑に

カンデインスキーの綾なせる彩

次期総理俺つきやないと思ひ込み

傘もささずにどしやぶりの中

佐々木 有子 捌

佐々木 有子

染谷 佳之子

長崎 和代

倉本 路子

篠原 達子

山本 千代子

竹田 登代子

路

之

千

ナオ
岩肌に爪立ててゐる蟬の殻

人魚を照らす月の涼しき

腰痛も夢の中では軽々と

妬き加減よき年上の妻

ねえあなたたまには素面で帰ってね

用二つ三つさつと片付け

ナウ
ナノテクと電子の時代ひたひたと

海市たつとて駆けてゆく子ら

面影の白鬚揺るる花の雲

テニスコートに小綬鶏の声

平成十五年十二月九日 首尾
於 箱根ヴェルデの森

同 代 之 達 登 代 有 登 路 達

山茶花や

山茶花や野水荷兮のむかしより

紅の散り敷く木枯しの庭

これやこの譲り受けたるなつめにて

フルートなども端正に吹き

月幾日山寺の階そそり立ち

佞武多跳人の送る流し目

わざはひをかくす色白秋のひと

詩詠む病膏盲に入る

一芸も秀で博士か大臣か

罪ある者も許し給へる

杉山 壽子 捌

青 島 ゆみを

杉 山 壽 子

古 賀 幹 子

を

壽

幹

を

壽

幹

を

汗^{ナオ}流すシャワーはさっぱりさっぱりと

ほてり治まる涼し三日月

天馬空駆けるがごとく株価高

縄で絡げて捨てつちまふか

熨斗つけて貰った男上げ膳で

内面般若外面女菩薩

う
に　つ　と　笑　む　モ　ナ　リ　ザ　今　も　そ　の　ま　ま　に

ララララ蝶を唄ふ幼子

花にきく世紀の進みゆく道を

春の遣ひの足跡は黄

平成十五年十二月三日　首尾
於　名古屋八事マルベリホテル

壽　を　幹　壽　を　幹　壽　を　幹　壽

筆跡の

筆跡の教へ滲むや小夜時雨

眠れる山に誓ふ言の葉

シンフォニー音おさへよと子に云うて

庭のハーブの香るクッキー

月^ウつれて銭湯へ行く宮大工

だらだら祭眉に剃り入れ

直球のぐさりハートに林檎落つ

路傍の石はやがてダイヤに

懲りもせず雀の餌付けする次男

危ない所行かせたくない

中野 昌子 捌

中野 昌子

松本 碧

生田目 常義

山田 美代子

碧

代

碧

義

代

昌

ナオ

ハンモックまどろむ夢にゴビ砂漠

ミイラの王女ほほに夏月

千年の緑の酒で婚かため

ひとさし舞はん羽衣の舞

若冲の野菜涅槃図壁に掛け

菩提樹越に空は青かり

ナウ

老いどちの遊ぶ南京玉すだれ

へえおおきにと笑まふ永き日

花筏猫は薄目に眺めゐる

どんと焼き上ぐ大桜鯛

平成十五年十一月十一日 首尾
於 渋谷連句会

義 代 碧 昌 義 碧 義 碧 義 代

運河に若葉

汐溜や運河に若葉影深し

プロムナードを歩む夏足袋

自販機にコインを二つ投入れて

何はなくともまづは珈琲

引越^ウしの荷物を照らす宵の月

おさげ髪して蟲籠を抱く

窓に立つ二人の胸の思ひ草

加茂の水面にさはぐ波音

モダンジャズいつも流れる地下のバー

写真パネルは友にそっくり

生田目 常義 捌

生田目 常義

水谷 紀 明

松 本 碧

青 木 秀 樹

樹

碧

樹

紀

樹

常

ナオ

犬櫓で雪原分けて行った人

田鶴鳴きわたり月は耿耿

鉛筆を削ればほのと匂ひ来て

画帳に残す町の変遷

魚屋の娘いつか大歌手に

波瀾万丈浮き名新たに

オウ

やうやくに杖両脇に退院す

春の土をばしかと踏みしめ

巫女の鈴ひびく^{*}斎庭の花明り

ふはり白蝶朝の静けさ

^{*} 斎庭（ゆにわ）… 神を祭るために清めた場所。大嘗祭を行うための古式宮殿。

執筆

碧

紀

樹

紀

碧

樹

常

紀

碧

平成十五年五月十六日 首尾
於 シオサイト電通

猫蓑庵明雅先生 追悼

晩菊の

晩菊のほろとくづるや掌

俯き歩む背に高西風

球場の月はいづくに昇るらむ

塩味もよきバターピーナツ

行き合^ウへば一も二もなく縄暖簾

うれしい時は片えくぼ見え

初恋にスケバン^{デカ}刑事も羞ぢらひて

出生率をあげる停電

次々と百物語蚊帳の外

我慢くらべのどぜう鍋食ふ

林 鐵男 捌

林 鐵男

中 野 昌 子

高 橋 豊 美

青 木 泉 子

梅 田 實

須 賀 敬 子

豊

泉

豊

實

青き眼も只管打坐せよ永平寺ナホ

白山幽邃姫神の棲む

発掘の遺跡に秘めし交歓図

オーソレミオを唄ふモト彼

月あびて馳の道へ分け入らむ

大勲位にも冬の来るか

名優ナウのシルクハットに高値つき

鶯餅に黄粉まぶして

長堤は雲と見紛ふ花盛り

蝶々の舞ふ野辺の安らぎ

平成十五年十月二十五日 首尾
於 角筈地域センター

昌 敬 男 泉 實 泉 敬 泉 豊 昌

十番の

十番の蕎麦屋を出れば秋祭

笛の音につれ上る名月

そぞろ寒編物記号教はりて

猫のしつけに悩む飼主

日本中禁煙の場の多くなり^ウ

少し疑ふ背広ポケット

さう言へば何年ぶりの恋だらう

携帯電話またも新型

清流に源氏蛭を追へる子等

ガラスの皿に西瓜盛り上げ

松原 弘子 捌

松原 弘子

梅田 實

井上 蘭石

青木 秀樹

難波 さえ子

式田 恭子

井上 鶴鳴

石

鳴

實

救急車タクシー代りに利用する^{ナオ}

洒落にもならぬいちめ続発

有罪とされても汝の腕の中

小悪魔の果て大悪魔なり

凍て月に回峰の僧ひた走る

六甲嵐今年こそ吹く

酒盛りの端に加はる陶狸^{ナウ}

祖母と母連れ憩ふ湯の宿

赴任地に向かふ夜汽車の窓に花

田の面を渡り遠蛙鳴く

平成十五年九月十四日 首尾
於 麻布十番 更科堀井

恭 樹 石 樹 さ 鳴 恭 さ 樹 實

産土は

産土は竹の春なり風の韻

十六夜待ちて開け放つ部屋

べい独楽を父に教はる子供にて

渦巻いてゐる指先の紋

大江山鬼は何匹棲むかしら^ウ

拗ねる仕草に恋が始まる

色白の紅の扱きを横抱きに

身じろぎもせず托鉢の僧

予約する鮫鱈鍋は再来年

港大橋牙ゆる電飾

宮川 侑子 捌

宮川 侑子

青島 ゆみを

武村 利子

高橋 良風

浅井 沙衣子

侑

を

利

風

衣

ナオ

モビールに芸術好きなセンス活き

キリコのやうな女現れ

切り捨てた漢の匂ひまだ残り

いやよいやよとお化け屋敷へ

まねき猫金を掴んで汗と月

優勝酒にタイガー雄叫び

ナウ

人の世はいつか苦難を乗り越えて

夢を叶へん凍てゆるむ頃

花咲けば遍路の笠も新しく

リズミカルなり鶯の声

平成十五年九月二十四日 首尾
於 熱田神宮龍影閣

恍 衣 風 利 を 衣 恍 風 利 衣 恍

重ね来し

重ね来し齡や霧の鬼子母神

銀杏黄葉にうすき昼月

きりたんぼそろそろ煮ゆる頃ならん

聞き覚えある訛飛び交ひ

棟梁も壁屋も縁者新居成る^ッ

亭主の悲願ブラネタリウム

プリンスの誕生皆が待ち焦がれ

地元で売れぬ自伝小説

息白く四股と鉄砲繰り返し

SARSと言へばすぐに反応

八代

嫋 捌

五味 蓉子

八代 嫋

吉村 ゑみこ

峯田 政志

権頭 和弥

高橋 豊美

蓉

ゑ

嫋

美

ナオ
貸し剥がしハイエナ商法のさばって

鯉があくびをしたかどうかは

琵琶打ちの佳境に声の裏返り

身八口から覗く柔肌

碧い眼の名物女将月涼し

抱き合ふ影の暗き夏河

オウ

シベリアのマンモスを掘る学術隊

ソルティ・ドッグ残る氷で

古木には古木に似合ふ花の形

ちよつとこいとて小綬鶏の鳴く

平成十五年十一月七日 首尾
於 雑司ヶ谷 大倉

志 弥 美 ゑ

志 美 蓉 嫻 弥 志

麦の波

山田 美代子 捌

朝日うけ走る列車や麦の波

翡翠よぎる畦の小流

アーケードミントのタバコ吹かしゐて

無造作に着る舶来のシャツ

月の客笑へる声のよく響き^ウ

秋狂言で見合ひ成功

久女にはならないつもり菊枕

腕立て伏せはいつも百回

エイズからサーズが猛威ふるひたる

氏神さまよ権現さまよ

山田 美代子

松本 碧

生田目 常義

豊田 好敏

常

敏

碧

常

敏

碧

ナオ

寒雷は瑞祥なりと酒すすみ

犬と少年望む冬月

電飾のチボリ公園木馬館

長きベンチの端に座りて

先生の鞆しつかり抱きしめ

叙勲がなんだ君が大事さ

ナウ

広重の雨ななめなり江戸の町

春の炬燵はゲームボーイで

全山の花を捧げよ阿弥陀堂

濃いめのお茶にあられ草餅

平成十五年五月十三日 首尾
於 渋谷連句会

敏 碧 常 碧 常 碧 常 代 同 敏

麦の風

文 音

ふるさとや青き匂ひの麦の風

子どもの日とて幟遠近

お得意のレシビに友を呼ぶならん

笑顔の写真パソコンに入れ

ふと見れば月煌煌と真向^ッひに

恋歌一首託す色鳥

地藏盆に睦みし井筒才丈けて

外ははんなり芯はしつかり

遠征のトライアスロン優勝す

思ひ出すのは父の拳骨

吉藤 とり子 捌

吉 藤 とり子

桑 原 美 津

八 代 嫺

吉 村 ゑみこ

山 田 喜美枝

と

津

嫺

ゑ

枝

河豚鍋を囲み地酒を酌み交はし

白山茶花を照らす寒月

セザンヌを落札したる「カジノ王」

大理石バス泡にうづもれ

豊満な美女と思へば我が枕

妻しのびつつ放浪の旅

ナウ

新型コロナウイルス

のっそりのっそり熊穴を出づ

花便り添へて傘寿のお祝ひも

外灯ともす淡雪の中

平成十五年五月六日 起首
平成十五年五月二十三日 満尾

と 津 嫺 ゑ 枝 ゑ と 嫺 枝

古池に

文 音

古池に蛙ひそめり庵跡

風やはらかに揺らす芽柳

卒業歌目に熱きものこみあげて

8ミリビデオ廻し続ける

兄弟子^ウは鍋奉行なり月見酒

旧き城下に澄める物の音

身に軽き秋袷着て遊山宿

あなたにあげる旅のかたみに

思惟仏の指のかそけく示すもの

戦なき世を祈る人々

若林 文伸

東 明 雅

若 林 文 伸

遠火事を野次馬眺むるばかりなり

不景気風のしみる二の酉

連れ立ちて歩くだけでも辛せよ

今はホスピス妻も夫も

宇宙船月と地球の涼やかに

ひそかに愛づる玻璃の蘭鑄

世田谷の豪邸暮らし夢の夢

北窓開く故郷の村

花の下父のボールを投げ返す

黄金週間続く青空

雅 伸

平成十四年三月十三日 起首
平成十四年五月十日 満尾

𠂇
半
歌
仙
𠂇

冬ぬくし

木村 真呂 捌

垂乳根の慈母観世音冬ぬくし*

木村 真呂

凜と石落の黄蹲の端

小林 真晃久

枝折戸を推して碁敵来たるらん

勿体ぶったきざなモノクル

文豪の墨痕からふ月の宿

新蕎麦に添へ新走りなぞ

遠^ウ離し子らにせかさる秋祭

ロボット犬に留守を託して

休園のレジャーランドに閑古鳥

未^{**}必の恋か密室の故意？

呂 久

「タブー」の香裸身にかほる月の閨

ギヤマンの杯にしとゞ酔ひ痴れ

自分史に虚実とりどりこきまぜて

戦に正も聖もあらざり

跳梁すオイルまみれの機械獣

かぎろひの野に浅き夢見し

伴連れの翁も入らせ花筵

最上下りのうらゝ舟唄

*慈母観世音…秩父四番寺の授乳の観音像

**刑法理論の概念に「未必の故意」とあり

平成十五年二月二十日 首尾
於 真晃久宅

鬼捨子

文 音

桑原 美津 捌

鬼捨子萩を織り込む風の中

野分過ぎ去り十五夜の月

新絹のドレスデザイン様に

ブラボーブラボー・ショーのフィナーレ

筒鳥の落葉松林奥ふかく

土用干しする梅かほり来る

金曜^ウは何故か売切れ油揚げ

通信講座「心」セミナー

愛の印金の十字架取り替へし

せしめし宝石筥にいったい

桑原 美津

吉藤 とり子

吉村 めみこ

山田 喜美枝

津

と

こ

枝

津

と

船の旅カクテル・カジノ楽しみて

夢に出て来たお袋の顔

昼月をかかげ初富士雪化粧

出湯の宿に狸一族

飲むほどに上司の悪口肴にし

躁の葉は鍵かかる棚

幾年か京の都の花明り

長押に傾ぐ春怨の面

こ 枝 こ 津 と こ 枝 執筆

平成十五年八月十一日 起首
平成十五年八月十六日 満尾

菊の酒

友情に空白のなし菊の酒

傾く月にまだ果てぬ宴

蟪蛄の斧ふり上げる敵なくて

四輪駆動びたり横付け

画題きめ巨匠の描く二百号

紫キヤベツとれたてを置く

日脚^ウのふ黒猫膝によりて来し

少女の声の透き通る頃

モンゴル風掠奪婚に憧れる

ケータイ覗き父の心配

五味 蓉子 捌

五味 蓉子

上月 淳子

内田 麻子

橘 朱鷺子

朱

麻

淳

朱

同

淳

禁断の木の実は今はためらず

巖かに鳴る聖堂の鐘

外出にポアゾンひとふき月涼し

帽子製作夜間工房

湯河原の麻雀仲間傘寿会

食後に甘き八朔を剥く

花の輪に世界をつなぐ夢捨てず

ビルの彼方に薄ら初虹

麻 蓉 淳 麻 淳 麻 朱 麻

平成十五年十月二十四日 首尾
於 房連庵

カルパッチョ

佐古 英子 捌

春鰯カルパッチョなるイタリアン

ポプラの絮のよぎる高窓

労働祭喋る若者しんがりに

小走りとなる青の点滅

月天心古城に馬の水呑場

はじめて涼し地酒酌み合ふ

クルーズの寄港先にて阿波踊^ウ

テキサス訛り押し通す彼

濃き紅で息もつかせぬ口づけを

娼婦の性をかくす毛衣

佐古 英子

金久保 淑子

篠原 達子

伊勢本 如代

同

淑

同

達

英

淑

質草も恋も流れる神田川

幽霊坂にニコライの堂

剣道部汗まみれなる朝月夜

午睡の夢はたちまちに消え

足腰が少し不自由介護一

絵手紙展で友は金賞

ベビーカー花のトンネル通りゃんせ

種初ひたす山の学校

達 淑 達 同 代 達 淑 達

平成十五年三月十二日 首尾
於 池袋 滝沢

一の酉

江戸開府四百年の一の酉

困つて駆ける童

彫り深き重き扉を開くらん

半熟卵朝の食卓

地下鉄の南出口に残る月

芸術祭のビラを撒きゐる

村芝居小さき橋をわたりゆく

純愛もどき恋のあこがれ

手さぐりの近松心中御法度で

床の五絶は墨蹟の軸

須賀敬子捌

須賀敬子

西田一枝

横山わこ

敬

枝

こ

敬

枝

こ

敬

同居して孝行息子板ばさみ

ブランドバッグ通販で買ふ

高々と昇る満月夏の潮

のれんくぐりて交はす冷酒

なつかしき御礼参りの連中と

蛍の光卒業の歌

新調の背広にかかる花吹雪

ボートレースに夢のコックス

平成十五年十一月八日 首尾
於 朝日カルチャーセンター

こ 枝 敬 こ 枝 敬 こ 枝

ゴッホの糸杉

春の空ゴッホの糸杉揺らぎぬる

親馬仔馬駆ける野の果

山笑ふ超高層を建てすぎて

やはりいつもの定食に決め

大潮の大波に見る月の影

幾何学模様保つ雁行

ハロウィーン魔女の衣装の裾をひき

死ぬほど嫌ひ医者と政治屋

外面の良くって内じゃ悪い酒

ケータイに来るゴメンネの文字

鈴木 千恵子 捌

鈴木 千恵子

武井 雅子

東 明 雅

原田 千 町

松島 アンズ

恵

雅

明

町

ズ

冬襖玉手我が子に濡れかかる

楳の宿にはささらこきりこ

鵜飼舟無月の川に焚く篝

遠くて熱い国の噂も

次世代に世界遺産を伝へゆき

コロッセウムを埋める観衆

草野球ヒットを飛ばす花の奥

筈の中には浅蜷蛤

平成十五年二月九日 首尾
於 柏市光ヶ丘近隣センター

惠 雅 明 町 ズ 惠 雅 明

月いづく 脇起り 文音

月いづく鐘は沈める海の底

二百十日の闇の静寂

新米のおむすび小さく三角に

電動自転車すいすいと行く

画像処理得意でベンチャー立ち上がり

木苺茂る猫の近道

沓石の下駄乾きかけ梅雨の雷

トンパ文字で書くラブレター

顎を剃る鏡の中に影過ぎて

裾にこぼれし長襦袢の朱

棚町 未悠 捌

芭蕉翁

棚町未悠

松島アズ

太田けんのすけ

悠

ズ

け

悠

け

ズ

爆弾を土産にしたる慌て者

毎年買つてゐる改版の地図

クリスマスキャロルの後の菓草酒

金門橋にかかる凍月

盗人のなたまめ煙管忘れられ

雛の客に並ぶ爺婆

伝へある花の大樹に祈るらん

パイプの煙流るのどかさ

悠

け

ズ

悠

け

ズ

け

執筆

平成十五年六月十六日

起首

平成十五年六月二十七日

満尾

匂鳥

草の戸や初音をしかと匂鳥

時を忘れて雛と対面

受験生単語帳など散らかして

床屋の椅子に頭さつぱり

瘦犬のすたすたよぎる月の路

鬼灯鳴らす児等と連れだち

故郷のこんびら祭久々に

榊酒酌んで友と交歓

競技場大理石とかオリンピックア

世界遺産に熱気溢るる

中田
あかり
捌

東 明 雅

荒 川 有 史

中 田 あかり

佐 藤 良 彌

山 田 喜美枝

同

雅

史

彌

史

珍しき物をみたさの雪女

新発意の僧清き鈴元

夢占恋人来ずと囁かれ

太宰治の月の夏富士

街中に斜陽銀行点在し

半身不随者支ふ介護師

飛花落花お手玉溶けよ薄紅に

春川ゆたか小鮎楽しげ

平成十五年三月九日 首尾
於 柏市光ヶ丘近隣センター

枝 雅 り 史 枝 史 り 彌

ハイテク交番

ハイテクの交番つつむ夜寒かな

薄目をあける街中の月

石榴の実絵具の色を探るらん

忘れた漢字いま思ひだし

囲碁仲間集まる午後の地区センター

インスタントのアイスコーヒー

俄雨鉢の岩檜葉よみがへり

紅はく刷毛でそつと悪戯

知ってるよ君のかはゆき隠し事

なぜ大吉の出ない御神籤

中林 あや 捌

中林 あや

吉井 景子

山口 美恵

橋本 喬木

木村 亮子

や

木

恵

景

恵

公約の語を塗りかへてマニフェスト

ローマ建国狼が負ひ

月明かり三杯飯の鍋破

果実酒なんかでもう酔っぱらふ

駅伝の通る道筋旗揺れて

土の匂ひを確かめる靴

子が泣けばチチンプイプイ花筐

まるで動かぬ春の浮雲

木 恵 亮 景 亮 恵 や 景

平成十五年十月三十日 首尾
於 文京区 一音寺

銀座より海

銀座より海を見にけり秋うらら

軽いランチの窓に織月

フルートは木犀の香を奏づらん

髭の手入れに余念無き猫

打水を一寸よけては立ち話

麦藁帽子の子が駈けて行く

地獄^ウ絵の胡粉残れる結願寺

山の深きに秘湯湧き出づ

男ゐて酒注ぎをりハイヤ節

あげんをなごに泣くこつはなか

難波 さえこ 捌

難波 さえこ

島村 暁 巳

鈴木 美奈子

長崎 和代

村田 富美

倉本 路子

代

奈

路

奈

留守電の短き間にも口説いてる

大つごもりに取りししみ皺

異土の月二十余年を越えし冬

鬼が出さうなけもの道なり

面売りのお哥兄さんは愛想良く

雛流しに淡き夢乗せ

加賀紋の色はんなりと花衣

ハングライダー春風の丘

平成十四年十月十九日 首尾
於 新宿赤城社会教育会館

巳 代 奈 路 美 巳 代 美

あつみ山や

脇起り

登坂
かりん
捌

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

菅笠の紐ほどく岩鼻

もてなしに二胡弾く人を招くらん

おとなしく坐すいとしうなる児

月覗く盆栽にある小宇宙

羽根整へる軒の燕

新蕎麦を自ら打ちて酒旨し

群論いまだ極め尽くせず

天災は忘れぬうちにやってくる

九回裏でのがす完封

芭蕉 翁

登坂 かりん

上月 淳子

林 鐵男

関口 靖子

淳

同

ん

淳

鐵

還俗の尼のメールに気を許し

ぎゅっと抱けば雪女とけ

冬薔薇の匂ふ新床月さして

東京中に増える森ビル

壁面はアンモナイトのさまざまに

地質時代に馳せる春愁

提げ鞆重たくなりし花の雲

観覧車までお伴する虻

同

淳

同

ん

鐵

靖

鐵

靖

平成十五年六月一日 首尾
於 江東区芭蕉記念会館

きらきらと

きらきらと光る水面や放ち鮎

柳絮飛ぶ土堤過ぐる銀輪

坪庭へ春の障子を開くらん

料理にがてな母を手伝ふ

満月を友とし帰る稽古あと

物の音澄みて遠きじょんがら

蜻蛉^ウのいろはのやうに止まる柵

ピカソ気取りにそつぽ向いてる

硝煙を嗅ぎとる地平雲低き

長き外套階を行く

間 佐紀子 捌

間 佐紀子

中野 昌子

鈴木 了斎

式田 恭子

村山 加津枝

林 鐵男

恭

男

斎

恭

恋ありて還俗決めし修道女

体を罪の走る喜び

青蚊帳に透けたる月の佃島

焼酎談義尽きぬ縁台

セ・パよりもてはやされる大リーグ

賭博レートは倍々となる

揺り椅子に仰げば花の散りかかり

末娘来て飾る紙雛

斎 枝 男 昌 斎 枝 佐 昌

平成十五年三月十七日 首尾
於 四宮ブルー桃径庵

樹の息遣ひ

雪吊や選ばれし樹の息遣ひ

焚火を囲む印半纏

トッピンググーフーフでピッツァ焼いて

柱時計は五分遅れに

素謡の稽古に励む月今宵

残る燕を探す軒先

新走り先づ一献と御曹司^ウ

うれしがられて募るわがまま

とんちんかんそこが魅力の恋の文

丸腰の兵海を渡らず

山口 美恵 捌

山口 美恵

近藤 守男

大窪 瑞枝

式田 恭子

峯田 政志

子

志

子

男

子

地獄絵も勧善懲悪僧都説き

牛の轅にかかる夏月

故郷は裸電気に糸とんぼ

メジャーのオフアー期してFA

談合をつぶすIT入札で

夢の間を巡る春風

胞衣^{えな}笑ひ花咲く門を八の字に

望潮が招く遠浅

平成十五年十一月二十七日 首尾
於 近藤守男邸

枝 男 枝 男 枝 男 枝 男 志

モガの衿元

冬ぬくし連衆集ふうれしさよ

二度咲きならんモガの衿元

白き部屋好みの布で飾りゐて

干菓子さまざま盛れる塗盆

アーケード切れた辺りにのつと月

籠の鈴虫見入る幼児

木の実降る貝塚遺跡訪れん^ウ

藍の妖気を秘めし勾玉

右肩に君のオーラを感じつつ

改宗したら妻にするから

山崎 一恵 捌

山崎 一恵

鈴木 美奈子

佐古 英子

青木 泉子

登坂 かりん

峯田 政志

梅田 實

恵

奈

英

海面を上に見てゐる国もあり

シーボルト像偲ぶあぢさゐ

月を連れ登山電車でジグザグと

とぎれとぎれにやるせなき唄

民主党はたして成るか政權に

獺の祭におかめひよつとこ

岡持の珍味に和む花の宴

風の絵柄に凝ってゐる爺

平成十五年十一月二十九日 首尾
於 大森山王 山崎邸

泉 英 奈 惠 實 志 ん 泉

こぶしの芽

銀色に輝く産毛こぶしの芽

背筋を伸ばす強東風の中

蜂の箱運ぶ仕事の厳しくて

転校生は喧嘩上手で

月煌としがらみすべて知らんぷり

交響曲を奏でゐる虫

芸術展落選作を返送す

箸までなめるアイスクャンデー

バクダッド遂に戦ひ火を噴くか

砂漠へ向かふ鳩を注文

山田 喜美枝 捌

山田 喜美枝

中田 あかり

東 明雅

佐藤 良彌

荒川 有史

同

り

同

雅

史

美しき姫はお侠を売り物に

手当り次第ヤングハンサム

しのび逢ひ秩父夜祭高き月

一升壺を尽くすやけ酒

耄碌の果ては骨粗鬆症に

人口倍に地球浮びぬ

川べりに足ふらふらと大花火

回り灯籠眺めゐること

り 雅 彌 同 枝 彌

平成十五年三月九日 首尾
於 柏市光ヶ丘近隣センター

柳絮かな

はく息のごとく舞ひ立つ柳絮かな

雪解の川に跳ねる小魚

爐塞に名代の菓子を供されて

ふるさと便はメール注文

高層のビルからひよいと宵の月

茶系で決める秋の装ひ

黄落^ウの蘇州に魯迅偲ふ旅

氷砂糖の溶ける老酒

熱き言ただ一言にときめきて

カミングアウト親のおどろき

山本 要子 捌

山本 要子

生田目 常義

鈴木 美奈子

中野 昌子

池田 やすこ

同

奈

昌

奈

常

手が外れててんてん手鞠の何処にか

嘆きの壁に増える弾痕

朝涼の真白き月に十字切り

遠泳の児を浜に迎へる

アトムにもテクノストレスあるならん

Ｌ盤で聴く旧きシャンソン

花吹雪風の捻れに添ひて行き

東西南北笑ふ山々

平成十五年三月三十日 首尾
於 渋谷連句会

昌 こ 常 こ 要 奈 昌 こ

表合せ八句　けふのこと

けふのことけふで終りぬ胡瓜揉む

夏野の月を胸に描きつ

波の音船影遠く離るらん

イスタンブールに運び込む像

男ひとり昼の祭の穴を掘る

万智の恋唄軟東風に乗せ

盃に花の散り込む午後のこと

黄金の糸紡ぐ上簇

秋元　正江　捌

秋元正江

倉本路子

橘　　朱鷺子

浅賀丁那

江

路

那

朱

平成十五年八月二十一日　首尾
於　羅浮亭

発句 佃祭

秋元 正江

うつせみや写楽終焉佃島

梧桐やGパン干され渡船跡

網文様藍甚平の祭の子

簀障子やくりからもんもん老いにけり

水かけて祭乙女のおくれ髪

白粉花の花の種盗る佃路地

広重の空曇りがち祭り幡

あ
と
が
き

猫養作品集第十四号に七十八巻ものの多数の作品を頂き、無事皆様にお届けする事となり、正直ほっと致して居ります。

昨年貝母亭清子宗匠より編集をバトンタッチされ、慣れない編集で至らない面が多々あるかとは存じますが、明雅先生のご仏前に捧げる事が出来ますことは、本当に感無量でございます。先生、どうぞ笑ってお叱りの言葉を投げ返して下さいませ。

なお、目次と作品に捌と記してない場合は、提出者のお名前です。また豊田の会員の皆様の作品は、新かな遣い表記となっております。

校正に完璧を期す事は仲々難しく自分の力不足を痛感させられました。

また、会長、副会長を初め、久保田庸子・八代嫺・山田喜美枝・吉藤とり子・吉村多みこ諸氏に校正のご協力を頂きました事を厚く御礼申し上げます。

平成十六年三月十日

梅田利子

猫養作品集 十四

平成十六年四月吉日 発行

発行人 青 木 秀 樹

発行所 猫 養 会

定価 二千円（送料別）

印刷所 株式会社 岩田印刷







